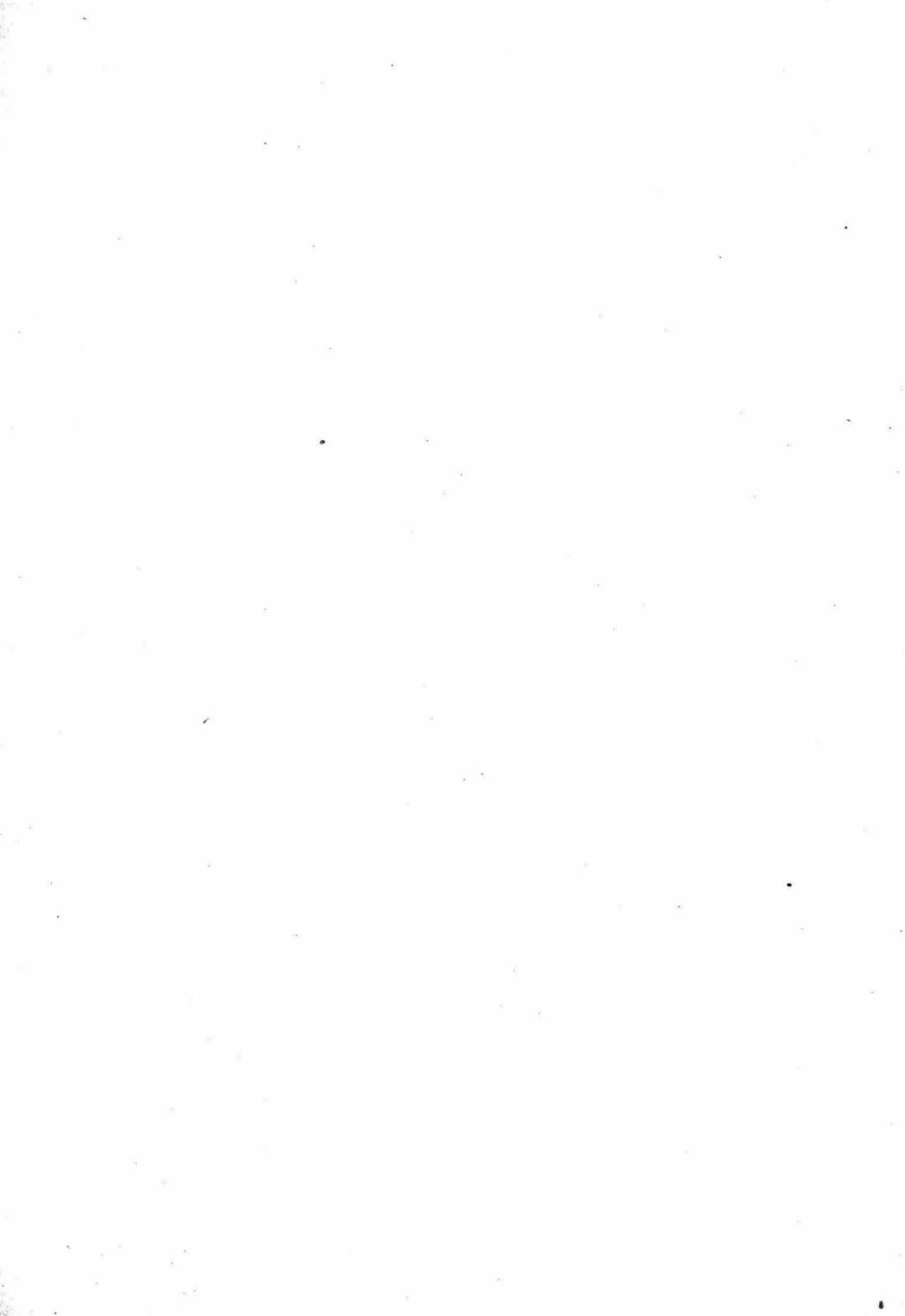


四、

漠

河

隊



アムールの船旅 (1)

ここで、日づけは一ヶ月あまり逆行して、ハルビンからの鉄道の終点、アムール河にのぞんだ黒河の町にもどる。

ながい冬ごもりのあと、アムールの河すじの解氷をまつて、モーホへとさかのぼる、この年の初航船は、いま黒河の埠頭をはなれようとしていた。五月一六日の正午だつた。モーホへは、八日ばかりの航程である。

はじめてみるこの大河のゆるやかな流れは、われわれを、さまざま思いに駆りやつた。クマラ河やパンガ河、あるいはやがてわれわれがさかのぼるはずのアルバジハ河などの支流によつて、北部大興安嶺の水の大部をうけいれ、さらにとおくシベリアやモンゴリアの水までをあわせはこんで、河はば一ぱいの流れは、たえまなく東へと去つていつた。うつとうしい空もようの下を、氣味わるくいどつてうごく、この満々たる流れのなかには、本隊の通路にあたる、ガン河の水さえまじつてゐるのだ。何年間もむなしく夢にえがいてきた、未知の大興安嶺の尾根や谷のありさま、そこにひろがる野地坊主の濕地や山腹をおおうカラマツの林、今まで地図にさえ満足にえがかれたことのないふくざつな地形や、あるいは白馬もそのために黒くなるといわれる、おびただしい吸血性昆虫の発生地の模様にいたるまで、われわれの知りたいとねがう祕密のすべてを、この流れはすでに知りつくしているのだ。それらの祕密を意地わるくおし包んだまま、われわれがこれからこころみようとするはかない探検の努力を、さらがらあさけるかのように、河は、ことさらにゆっくりと動いてゆく。その水をこえたはるかな対岸には、グラゴエシエンスクの町の白壁やあかい屋根が、ねずみ色の空を背景に点々とちらばつて、う

つくしく眼を射た。

しかし、そこは、もはやわれわれの立ち入りをゆるさない世界であった。河を横ぎろうとする小舟の姿さえなく、流れは両岸のあいだのすべての連絡と接觸とをたち切っていた。渡ろうとおもえば渡れないのではない。埠頭のかたわらに立つ放送塔の拡声器の声は、ひろい河はばをこえて、たやすく対岸にとどくであろうし、双眼鏡をもちいたなら、向う岸をさまよう人々の姿をとらえることもできよう。しかしあれわれには、そこにゆき、それらのひとびとの手をとってともに語ることが許されないので。單に國境という一本の線が、地図上で、この河のまんなかに引かれているというだけで、おなじ人間どうしの接觸が、文化の交流が、生活の協力が、むざんに断たなければならないとは、いったいどういうことなのか。われわれが手を振ればかれらも手を振り、われわれがほほえめばかれらもまたほほえむであろう。たとえ民族がちがい、習俗をことにしていても、人間としての親しみや愛情は、だれとでも持ちうるというのが、われわれの今までの旅行からえた体験であった。しかも、この河をこえようとすることろみのすべては、おそらく射撃によつてむくいられ、牢獄におわるであろう。たとえその越境の意図が、單に、シベリアの曠野をさまよいその自然にひとり、そこにすむひとびとの文化にしたしくふれてみたいといふ、ただそれだけの願いにすぎなかつたにせよ……。シベリアの水と満洲の水とは、いまここにまじりあって流れているのに、人間だけはべつなのだ。その現実の暗さが、対岸のうつくしい風景をさえ、かえつて重圧と感じさせ、おもわずそちらに背をむけさせるのであった。

埠頭には、初航船をおくる人たちが黒山をなし、船室にすしづめになつたひとびとと、日々に別れをさげびかわした。どらが鳴り、船と陸とをつなぐ板橋がはずされて、船はしづかにうごきはじめた。見おくりの群衆からは、「ほたるの光り」の歌ごえがわいた。熊沢さんやその母堂や、省公署の役人たち、新聞記者などの見おく

りの姿がちいさくなり、黒河の町は、しだいに遠ざかっていった。

船は、二〇〇トンばかりの小蒸氣船で、薪を燃料としている。船室は、上下二段にわかれ、最上層は、ひろい甲板になっていた。ふつうのスクリュウのかわりに、おおきな車輪をふたつならべ、そのあいだに板をうちつけた、水車式の推進機が、船尾でゆっくりと廻轉して水をかいた。それは、フロンティアにふさわしい、なにかロマンチックな氣分をおこさせた。長春から黒河へくるまでに、おいぬいてしまった春に、まるでおいつかれまいとつとめるかのように、水車は茶褐色の雪どけ水をけんめいにかきわけ、まぎりくねつた河すじを流れにさからつて、けんめいに西北へとさかのぼりづけた。

両岸は、たいてい山腹が水ぎわまでせまり、はじめのうちは、モウコナラやハルニレなどの廣葉樹の疎林がそのうえをおおっていた。地表は、おち葉で一めんに黄いろいいろどられて、秋かとおもわせるほどであった。ところどころ南むきの斜面だけが、シラカンベの白い肌にぎっしりとうずめられていることもあつた。木々の葉は、まだ芽ばえず、はだかの枝だけが、さびしげに手をうえにひろげていたけれども、その色あいには、すでに春のいぶきがどことなく感じられた。場所によつては、山が河岸から遠くしりぞき、シラカンベの点在する平原が、河とのあいだにひろがっている。すると、シベリアがわでは、しろい壁やあかい屋根の比較的まばらな村落が、満洲がわでは、黄いろい土壁、黒い屋根のかたまと聚落が、姿をあらわす。水路の關係で、シベリアがわの岸ちかくを船が通ると、流れで衣類を洗うカチューシャかぶりのロシア娘のかれんな姿が、頭をあげてわれわれを見おくつた。子どもたちもあつまつて、ものめずらしげに、船のゆきすぎるのを見まもつてゐる。しかし、そんな平和な風景ばかりがみられるわけではなかつた。あちこちの崖のうえには、鉄條網をはりめぐらした、ソ連の監視所らしいものが立つてゐた。双眼鏡をむけると、むこうからも眼鏡でみてゐるのがわかる。「写眞をとる

と射たれるかもしませんよ」と船員が注意した。船のほうにも、數名の日本兵がのりこんでいた。あるとき、ひとつの船室のとびらがあいていたので、なにげなくのぞきこむと、かれらは、窓べに身をかくしながら、ソ連がわを見張り、なにごとかを机上の地図に書きこんでいた。ここではすでに、國境をはさんで、みえないたかいがはじまっているのだ。

船には、日本婦人がかなりたくさん乗っていた。みな奥地に勤めている日本人の奥さんたちで、申しあわせたようく小さい子供たちをつれている。この人たちは大部分、昨年國境の形勢が險惡だというので日本に引きあげたところ、一應情勢もおちついた形になつたため、ふたたびもとに帰る途中であった。そのなかに一と組だけ夫婦づれがいて、ほかの奥さんたちの羨望の的になつていていた。しかしこれらの奥さんたちも、まもなくそれぞれの主人のもとへ帰れるというので、いたってほがらかであった。目的地に着いてから生活の淋しさは、この人たちの頭から、今のところ忘れ去られているようであった。

船は、ときどき、満洲がわの小さい村々に足をとめて、こうした奥さんたちのいく人かをおろしていった。船がとまると、村ぢゅうの老若男女が、去年の秋いろいろ半年ぶりに外界の空氣をもたらすこの初航船を見るために、埠頭にあつまってきた。氷がとけ、ヤナギの芽がふくらみ、迎春花(イントンボ)とよばれるオキナグサが紫の花をひらくとともに、ひとつが一日千秋の思いで待ちこがれてきたこの初航船である。青い綿入れのみすぼらしい服をきた農夫たちは、岸べに人垣をつくり、ながい冬ごもりから解放されたよろこびに笑いざめき、荷上げされる物資をみては、安堵に浮かれさわいだ。赤いよごれた着物の子どもは、ひきつめ髪の母親に手をひかれて、ふしぎなものでも見るよう、船の姿をながめている。そのうしろの耕地はまだ土が黒く、家々の黄いろの土塙とはつきりした色の対照をしめしている。その土塙も、なかばくずれかかっているものがおおかつた。

ある小さな村での、みじかい碇泊ののち、うごきはじめた船の甲板から、わたくしは、なごりおしげに見おくる群集を、なげなく眺めていた。するとふと、埠頭からすこしはなれた河べりのヤナギの茂みのかけに、めずらしく洋装の若い婦人がただひとり、腰をおろしてこちらをじっと見つめているのに気がついた。近い距離ではあつたが、念のために双眼鏡をむけてみると、その顔はまぎれもなく日本人だった。おそらくは、村に駐在する警察官の奥さんでもあろうか。この小さな村の様子からすれば、たぶんその夫をのぞいては、ほかに日本人とて住んでいないであろう。語りあう友もなく同胞からとおくはなれ、郷愁にかられながら異境の奥地にくらす淋しさが、その表情にきざまれていた。ひさかたぶりの故國のひとびとを、ただひとり默然とみおくる心情をおもえば、正視にたえなかつた。船は速力をまして、しだいにとおざかり、やがて流れの屈曲をまがるとともに、その小さな人かげは、眼界から去つた。

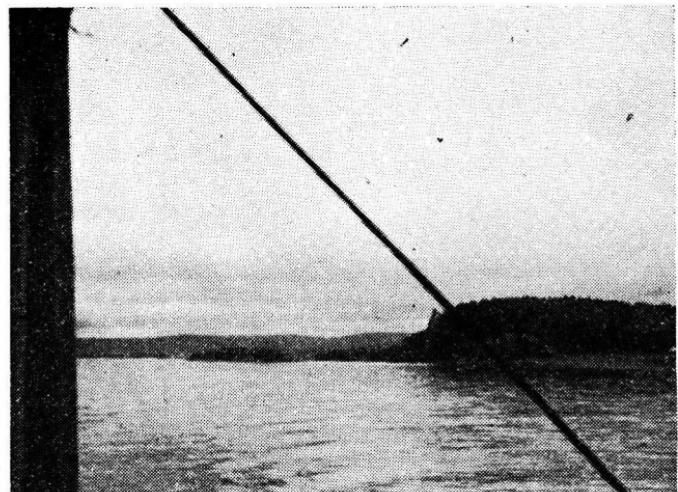


図 46. アムール河.

分的ちらほらとすがたをみせていたカラマツが、鷗浦をすぎたころから、しだいに勢力を増し、アカマツやシラカンベをはじめて、色彩はゆたかになった。カラマツの灰褐色の小枝が、たがいに交叉するあたりに、ほのか

にうす緑のヴェールがかぶさったようにみえるのは、すでに芽がうごきはじめたことをしめすのであろう。これからさき、われわれが、あけても暮れても、そのなかでのみ生活しなければならない大樹海の、これがはじまりであった。

この北國では、天候のちがいによってうける氣分の相違は、おどろくばかりであった。あお空がひろがり、陽がさんさんとさしてくれば、山腹のカラマツも江岸のヤナギも、あるいはちらほらみえる部落も、春の樂しさにかがやいてみえるが、一たん雨がふりだせば、たださえ濁っているアムールの水は、陰うつな空の下に一そう黒っぽく、じめじめとした寒さが身にしみて、オーバーなしに甲板でれば、身ぶるいしなければならないぐらいであった。せっかくの春がふたたびひっこんで、みじめな冬がまた帰ってきたような氣もち、そんなときにはわれわれは、船室にひっこんで、うす茶をたてては氣分をなぐさめることにしていた。隊員のすべてにとつて、これはなによりの樂しみで、わたくしが茶をたてるといえば、みなはりきって湯をくんできたり、船の賣店からようかんを買ってきたりした。河水をわかした湯には、色がついていたが、黒河での評判では、この水は茶にもつてこいだということで、味はちっとも氣にすることはなかつた。

日の暮れるのはおそく、晴れた日では、午後八時すぎても、日本の五時くらいの感じであった。船の通つてきたあの江上に、夕日に赤くそまつた雲が移り、すくすくとのびたカラマツが、山稜にくっきりと姿をうかばせている光景は、さながら一幅の絵であった。夜は星が宝石をちりばめたよう、北極星の高さはわれわれに異境にある身をおもいださせた。(以下一〇節 森下)

アムールの船旅 (2)

アムールの船旅 (2)

日々の船上生活のあいだに、わたくしは一五一六歳のかわいいシナ人のボーイとなかよくなつた。夜、空いた食卓で、手紙など書いているわたくしのところへ、かれはよくやってきて、片言のシナ語のわたくしと、とんちんかんな会話をとりかわしては笑いあつた。ある朝かれは、甲板にいたわたくしをとらえて、きょうの午後船がつくところへ上陸すれば、とてもいいものがあるからといって、見ることをすすめた。いいものとはどんなものだときいても、とてもきれいなものだからぜひ上陸してごらんなさいと笑うだけで、くわしいことは話さなかつた。話しても、わたくしに理解できるように説明するのは、むずかしい、と思つたのかもしれない。午後になつて船がついた場所は、河ぞいには家もみあたらぬ、シラカンベ林をうしろにひかえた埠頭であつた。薪積みのための碇泊である。隊員たちは、釣り竿をもちだして、船尾で魚釣りをはじめたが、わたくしは少年のことばに好奇心をそそられ、とにかく上陸してみることにした。岸に上ると、道はすぐあかるいシラカンベの木立ちのなかに分けいつてゆく。さしたる傾斜もない、ひろい段丘の林のなかに立つと、まるで信州の高原をさまよつてゐるこちちであった。登山者が群れあつまる日本の高原とちがつてゐるのは、どの一本の樹を見ても、皮をはがれた跡ひとつない、すんなりとした白いうつくしい肌をもつてゐる点であつた。陽はささなかつたけれども、この氣もちのいい林のなかで、わたくしの心は喜びにみち、上陸をすすめてくれた少年に感謝したい氣が一ぱいであつた。すこしゆくと、林間に小さい空き地があり、そこに先に上陸した同船の日本人が七一八人かたまつて、なにかを眺めていた。近よつてみると、それは、ケズネアカヤマアリとよばれる赤蠶の、おおきな山形の巣だつた。

おち葉をあつめてつくったその巣は、高さ八〇センチばかりのみごとな円錐形をなし、空き地のなかにただひとつ、地表からつき立つその姿を誇っていた。

「これはなんでしょう。」とひとりがわたくしにきいた。

「アリの巣ですよ。」

「このなかにアリがいるのですか。」

「いるでしょ。」

とわたくしは枯れ枝をさがして、すこしその巣をつついてみた。表面にはまだ出ていなかつたが、かきまわされた部分からは、数匹のアカアリが姿をあらわし、のろのろと巣のうえをはいまわった。夏ならばおそらく活潑にとびだし、棒をつたって手にまでかみつきにくるであろうが、春さきのこととて行動は敏活を欠いていた。

「まだすこし寒すぎるのでですね。」とわたくしはいった。

するとひとりが

「じゃ、あたためてやろう。」

といきなりポケットから紙きれを出して巣のうえにおき、マッチをすつた。ほかのひとりが、小さな枯れ枝を數本その上にくわえた。火はパチパチとはぜてもえあがり、巣の表面を焦がした。わたくしはなにか胸の苦しくなる思いで、このいたずらを眺めていた。とめようかとも思つたが、それもおとなげないような氣で傍観していた。アリはさらに何匹かはいでて、火のまわりをうろついだが、火はひとしきり燃えさかつたあげく、しだいにおとろえていった。わたくしはふと、このなかのアリが蟻酸をだして火を消すという、荒唐無稽の説を思いだしたが、このときのアリは、もちろんそんな行動をとったわけではなかつた。アリの出かたがすくないのは、冬

眠からさめてまもないのに、巣の成員の大部分が地下の坑道にひそんだままだつたためであろう。しかしひとびとは、もつとたくさんのアリを見つけだそうとして、手に手に枝をとって巣をかきまわした。ついにあのみごとな巣は、いまは見るかげもなく破壊され、もえくすと散乱した枯れ葉のなかに、わずかのアリがあてもなくうごめいていた。罪もないアリが營々としてきずいた成果にくわえられたこの残虐も、もとをただせば、わたくしが最初に巣をつついたのからはじまつたことである。わたくしは、後悔の念に胸を嚙まれながら、船にかえった。船がふたたび動きだしてから、甲板で景色をながめていたわたくしの横に、ボーイはまたやつてきた。「あんたがこわしたんだろう」と少年の声がふるえた。わたくしは、愕然としてふりかえった。その顔は怒りにもえていた。このときはじめてわたくしには、少年のすすめてくれた「いいもの」が、なんであつたかがわかった。あのアリの巣だったのだ。あの巣こそは、單調な船の上り下りに、少年の心を慰めていた宝物だったのだ。少年はあとから上陸して、われわれ日本人の心ないしわざの結果を見たのである。おそらくは半年ぶりに、その巣をみる楽しみに、心をおどらせていったであろうに。わたくしは一そら悔恨の念にせめられ、わびたいと思つたが、てきとうなことばを知らなかつた。「夏になればまた巣をつくりなおすだらうから、心配しなくてもいい」といってなぐさめようとも思つたが、それもことばが不自由で、口にすることができなかつた。それに、たとえそれをいってみたところで、いまさら何にならう。ことがらは小さくとも、信頼をうらぎられた少年の心の傷は、もはやなおすすべはないのだ。一度うえつけられた「日本人」への不信の念は、年とともに成長するであろう。われわれの「こどもっぽい」いたずらの結果は、そのような民族間の心の溝をつくるきつかけとなりはしなかつただらうか。責任はわたくしにあつた。立ちさつた少年は以後わたくしと口をきこうとはしなかつた。船にいるあいだ、なんとかして和解の道を講じようと、わたくしのほうではつとめたけれども。

船は、しだいにモーホへとちかづいていった。ときおり、ちいさな流水が、船の近くを流れゆくのをみるようになつた。江岸にも、氷の堆積がだんだんふえてきた。たいていは黒くよごれているが、なかには、眼のさめるようによつて白なのもある。ある夜、シベリアがわの切り立った崖が、あかるい火花をとばしてもえているのを見た。河に面した、露出した炭層がもえているのだった。ときどき、ひとかたまりの火のだんごがくずれおち、中途で岩にあたつてくだけては、こまかい火の流れが、矢のように河におちる。船員は、こうして何十年ももえつづけているのだと説明した。事実、前世紀末にここをとおったブルシェワルスキイは、ちゃんとこのもえる崖のことを、記録にのこしているのである。われわれは、花火でもみるようなその光景を、あきずにながめて立ちつくした。このあたりから、アムールの谷は、壯大な峡谷となつた。両がわを切り立った崖にかぎられたなかも、ゆたかな渦流は、崖から崖へといっぱいに流れる。峡谷にはいつても、依然としてくりかえされる、はなはだしい蛇行は、いっそ峡谷の印象をふかめた。ゆくてに立ちふさがって、航路をさえぎるかとおもわれる大岩壁が、船のすすむにつれて、クルリと向きをかえて、また新らしい岩壁を前にむかえる。おおくの旅行者たちが、くりかえしてほめたたえているように、モーホからアルベジンのあたりまでの峡谷は、アムールの河すじゆびおりの風景といえよう。⁽¹⁾

峡谷の側壁は、どこまでいっても、カラマツの一色におおわれている。しかし、モーホにちかく、流れが東西に走っている部分では、しばしば、シベリアがわだけが、シベリアアカマツばかりの林となつて、満洲がわと河ひとすじをへだてたばかりに、林相が一変しているような印象をあたえた。これは、のちに説明されているようないい、南斜面の岩礫地をこのむアカマツの性質と、斜面の向きの組みあわせとのつくりだした、一種のトリックにほかならない。崖をのぼりきつて、シベリアの台地上に達すれば、そこからは、やはり、カラマツの樹海がはじ

まつてゐるにちがいないのである。

いよいよモーホが近づいて、われわれの胸には、まだ見ぬこの町への興味が、しだいに高まってきた。われわ

れは、出発のまえ、この町についての、さまざまのうわさをきいていた。金鉱町のなごりで、おまけに軍隊も駐在していなかから、人心は殺伐をきわめ、二挺拳銃が横行して、武装しないでは町もあるけないともきかされていた。

それなら、まるでゴールド・ラッシュ時代の、西部かアラスカの金鉱町そっくりではないか。一九四〇年代にそれが

あじわえるなら、これはえがたい体験である。長春をでるまえから、学生隊員たちが、この町にかけていた期待は、けだしたいしたものだった。もつとも一方では、われわれの輸送しようとする大量の食糧が、掠奪のうき目を見はないかということも、一時はまじめな話題にのぼりさえし

た。もし事実そのおそれがあるものならば、それそうとうの心がまえがいるだろう。二四日の朝、予定より一日おくれて、船はしづかにモーホの埠頭についた。



図 47. アムール峡谷のソ連がわの岸にみられる、シベリアアカマツの林。

けた。飛行機でモーホにとんでもいらい、電信の不通のために、江原との連絡はまったくきれていたので、万一これがふたたび空路黒河にひきかえしてこないかといふ、ゆきちがいの心配がなくなつて、われわれはホッとしました。船がとまり、橋がかかると、江原は、まっさきにはせあがつてきて、われわれの手をにぎつた。かれは、あおいシナ服をきて、どうやら、かくしには、小型のピストルをしのばせておるようだつた。二〇世紀の金鉱の町は、一ヶ月まえの学生を、はやくも一人まえのフロンティア・マンにしたてあげたらしかつた。

〔註〕

① たとえば、鳥居龍藏（一九四三）黒龍江と北樺太。東京。

ジエルトウガ共和国

モーホの町の歴史は、興味津々たる一篇の物語りをなす。それが興味をひくのは、單にこの附近がかつて一大採金地であったといふばかりでなく、短期間ではあつたが、一時はいづれの國の支配をもうけない、採金者を中心とする一小独立國を形成していたといふ点にある。一八九八年出版のボズドネエフの満洲記には、これをジエルトウガ（漠河）共和国とよんでいる。

この附近に金を産することは、すでに一八六〇年、ロシアのコサックによつて発見されていたが、以後一八八三年までは、小規模の密採掘がおこなわれてきたのみであった。ところが、この年、ひとりのオロチヨンが、ジエルトウガ川の野地に母の墓地を掘ろうとして、偶然若干の金塊を掘りあて、これを採金業者のセレドキンに通知したのが、モーホ金坑繁榮のいとぐちであった。セレドキンから派遣された技師は、第一回の試掘でたちまち

好成績をえた。それから正式の採掘がはじまつたが、技師はそのうち乱醉のすえ、半死半生でロシア領にはこび去られ、のこされた労働者たちは、勝手にじぶんの所有として採掘をつづけた。とかくするうちに、前代未聞の豊富な金坑の発見のうわさは、アムール一帯からザバイカルにかけて一めんにひろがり、おおくの職工や勤め人は、それぞれ仕事を放棄して、われ先きにと金坑にむかい、そのほかよその金坑の脱走囚人、流刑人、冒險者たちもこれにくわわつた。数カ月にして、いままで人煙稀であったこの地の労働者の数は、たちまち五〇〇〇ないし七〇〇〇人に達し、人種からみても、ロシア人・シナ人・朝鮮人・オロチヨン・ユダヤ人・フランス人・ボーランド人・米國からわたってきた冒險者など、ほんんどれなく各國民の代表者をあつめていた。一八八四年から八五年にかけては、最小限に見つもつても、一〇〇〇〇人以上に達していたものとおもわれる。

採金者の群れとともに、商人もまた移動をはじめた。最初のうちは、これらの住民に対する食糧供給者は、國境附近のコサックであつたが、人口増加とともに、おいおい遠方からも小商人があつまり、乾パン・牛肉・穀物・火酒・アルコール・諸道具などを仕入れてきては、ひじょうな暴利をむさぼつた。物價は、下流の町にくらべて、二倍から四倍に騰貴し、そのうわさによつて、ザバイカルの商人や一般住民は、いっそう動搖した。イルクーツクの市民でさえ、じぶんの不動産を賣り、家財を賣り、すべてを質入れして、食料品・織物そのほか諸雜貨を仕入れて發送するものが続出し、ウエルフネ・ウジンスク、ネルチンスクなどの市民も、これにならつた。またたく間に、この地の商店や遊興場の数は、一五〇軒にも達し、賣れゆきの王座は強烈な酒類であつた。紙幣は流通高が不足し、決済はおおく金をもつておこなわれた。ホテルもいくつか建てられ、數戸のパン製造所、動物園、錢湯、手品師や曲馬師などの興行物、樂隊などもあらわれ、数カ月まえの野原に、忽然としてヨーロッパ風の天地が出現したのであった。労働者は、すきまを苔でふさいだ丸太小屋に收容され、四〇〇以上のこれらの

丸太小屋が、中央廣場からびる道の両がわに街をかたちづくった。廣場に面するジエルトウガ金坑政府の前には、二門の大砲さえそなえつけられた。横の祈禱所には、脱走囚人の読經僧および司教がいて、つねに申しぶんなく勤行し、組織ができあがってからは、公費支弁の病院も建設された。

金坑の住民は、脱走囚人や一攫千金を求めるものなど、雑然たる寄りあい世帯であったが、そのうちおのずとひとつの組織ができあがった。はじめは、女は入れられず、純然たる男の國であつたから、住民はおおくの組（ひと組は一〇一一五名）にわかれて、作業や生活をおこない、全部の組を三区にわけて、各区に区長を選挙し、その区の秩序をたもつことにした。区長は小事件を裁決したが、重大な事件は住民大会によつてこれを決した。しかし、初期には盜みや紛争、各種の暴行沙汰が絶えず、投機熱と賭博の流行とが相まって、町は百鬼夜行の状況であつた。区長でさえも、盜みをはたらいては逃走し、あるいは捕えられて、ながくつとめあげるものはまれであつた。暴力と混乱とが町を支配し、秩序と安寧とは姿をひそめた。

しかしついに、ひとつの事件がきっかけとなって、住民はたちあがつた。一八八四年一二月、ある日の白晝に、ひとりの厨夫が鉄槌によつて、残忍きわまるやりかたで殺害された。この知らせをうけて、秩序を求める住民たちはけつ起して集会を開き、六日間の論議ののち、風紀と秩序とを独裁で維持する一名の主権者を選出し、すべての住民を支配する権限をあたえた。主権者には、ジエルトウガ金坑長老の称号が、衆議によりあたえられた。えらばれた新長老は、教育もあり清廉潔白な人物で、そのうえ生來の精力家であった。労働組合と区とが再編成され、区長の選挙制と権限とが確立し、裁判制度と刑罰とが決定された。重大事件と非常の場合には、大砲を発射して住民大会を召集するほかは、長老があもなことがらを決定した。犯罪に対する处罚には、たとえばつきのようなのが定められた。

殺人罪に対しては死刑

窃盗に対しては五百打

男色その他不自然な罪悪及び犯罪に対しては五百打

醉態で武器を携帶したものに対しては五百打

砂金の偽造に対しては五百打

正当な理由なくジエルトウガにおいて発砲したものに対しては五百打

以上の犯罪に対しては、笞刑とはいえ、いばらのようにするどい釘を打ちこんだ鞭によって打たれたから、ほとんど死刑にひとしいものであった。軽犯罪に対しても、こまかい規定がもうけられた。たとえば

金坑に婦人をつれてきたものは棒をもって四百打

夜間騒いだものは二百打

公然醉態を演じたものは杖をもって一百打

などであった。なお「ジエルトウガにおいて刑罰を受けた者は、この地に帰還の権利を剥奪して直ちに放逐し、且つ犯罪を嫌忌して悔悟の念を起させるため、境界において更に百打を加える」と規定してあった。

人種・階級・国籍の別なく、何人もこの法令には服従の義務があった。まず手はじめとして、まことに犯罪をおこなったものに適用して、一日のうちに殺人犯人三〇名を絞刑に処し、ついで各種の重輕罪犯人に対するおそろしい笞刑が、二週間つづいた。この苛酷な法令の実施は、はたしてたちまち効果をあらわして、不良分子は影をひそめ、一同はことごとく新制度に服した。

ジエルトウガの秩序が回復したうわさが、全ザベイカル州につたわると、商人はさらにぞくぞくとこの地につ

河 漢 隊 めかけ、しばらくのうちに、常住商人はその数三〇〇にも達した。そのほか、肉類などの商品を、附近の村々からここに市場にもつてくる行商人もひじょうにふえ、物價もしだいに低まつた。法令にしたがつて、一般の商品に対しては賣り上げの一割、アルコールに対しては二割五分、料理屋・遊興所の經營者に対しては毎月收入の二割の營業税が課せられ、金坑政府の会計員は、毎月徵稅の收支計算書を作成して集会に提出し、集会はまたいつでもその提出を請求する権利があつた。稅收は、役員の給料、一〇〇一一五〇名の守衛の手当、病院の維持などにあてられた。守衛は、一般の秩序をたもつため、三組の巡察隊を組織して、毎夜町を巡察し、同時に消防の役も兼ねていた。

採金作業は、數名、十數名、數十名などからなる、おおくの組合単位でおこなわれ、組合員は、階級の差別なく、すべて一様に仕事をする義務があつた。住宅・道具・馬およびそのほか労働用必需品の購入資金は、各組合員が同額ずつおさめ、採取した金も、組合員全体の費用を引きさつた残額を、作業の種類如何をとわず、毎日平均に分配した。あたらしく組合に加入しようとするものは、組合員全部の承諾を要した。組合は、人数九名に対してそれぞれ採掘予備坑を二つずつ持つことを許されたが、のこりの予備坑はジェルトウガ自由金坑組合員全体の所有として、政府の選衡によつて、必要に應じ適宜に分配された。こうしてこの新天地に、共産主義的色彩の濃厚な生産組織が、他から隔絶してつくり上げられたのであつた。

自由金坑の存続期間中の採金量を、精確に推定することはむずかしいが、一八八三年の秋から一八八五年の春までのあいだに、ゆうに七〇〇〇キログラム以上には達したであらうと考えられている。もつとも採掘量のおおかったのは一八八三年の冬で、八四年の冬になると、それほどおもわしくなり、八五年には一そくその量がへつた。それでも、八五年の三月、ロシア領の哨兵線でたまたま抑留されたジェルトウガ退去者の所持金だけで

も一一〇キロにのぼったという。

そのころ満洲の官憲は、この辺境地区に対しても、ほとんど注意をはらわず、アムールの全沿岸にわざか六ヶ所の國境監視所をもうけているにすぎなかつた。それさえも形式的で、監視兵でじぶんの任務が何かを解するものすらまれであつたといわれている。しかし、モーホ金坑がさかんとなり、一二〇〇〇人の坑夫があつまつたといふ評判が高くなつて、満洲がわもはじめておどろき、璫琿^{アイゲン}の副都統は、ロシアがわのアムール総督とのあいだに、ロシア人の満洲領内における金の密採取について、交渉をはじめたが、その交渉はなんの成果をもたらさなかつた。業を煮やした清國政府は、一八八五年の秋、この金坑に討伐軍をさしむけ、ジェルトウガ破壊を開始した。金坑がわは、抵抗したけれどもついに敵せず、あくる年の一月共和國はほろび、すべての労働者は追放され、建設物は焼きはらわれた。勇敢なものは、立ちとどまつて生命を犠牲にした。こうして、瞬間のうちに出現した小新國家は、また瞬間のうちについ去つたのである。⁽³⁾

共和國のほろびたあと、シナがわでは一八八八年に漢満会社をもうけて採金をおこない、守備隊をおいて金坑の保護にあたつた。しかしそれもつかのま、一九〇〇年の北清事変のとき、モーホの町は破壊され、守備隊および住民はちりぢりとなり、そののち一九〇六年まで、ロシアは、モーホその他のアムール右岸の地方にシナ人の立ち入りを許可しなかつた。一九〇六年ロシア軍の占領が解かれて以来、シナの採金業者や商人は、この地方にかえりはじめ、金坑はふたたび開設されたが、採金量の減少と相まって、共和國のころの繁栄はもはや見るよしもなかつた。一九一七年のシナがわの調査によれば、モーホ金坑の坑夫は二四三〇人、漢河縣内のほかの金坑をも全部あわせて、採金量はおよそ三〇〇キロであった。満洲事変以後は、満洲採金会社がモーホに支分所をつき、附近の採金に従事しているが、もとのジェルトウガ金坑の経済價値は、もはや、いうに足りないものとなつ

てしまった。現在モーホの町の南方二〇キロばかりのところにある小部落老溝が、かつての金坑の所在地である。

〔註〕

①ジエルトウガの名は、いまも一部でもちいられてゐるようである。たとえば、プレチュケの地図には、ラオコウから東に流れるアルバジハ河の支流に、シエルトウガ (*Scheltuga*) の名を記入している。この川の川原では、現在でも、砂金の採掘がおこなわれ、シナ人は老溝河とよんでいる。

②ジエルトウガ共和国の詳細については、満鉄調査部資料第六号、「黒龍江省、下巻」をみよ。

モーホでの準備

さて、なによりもわれわれの氣がかりだったのは、モーホでの物資の調達であった。黒河では、冬ごもりのあとのモーホには、ほとんど食糧などはのこつていまい、という意見がつよかつた。しかし、初航船にのりこもうとすると、黒河でいろいろな物資——ことに食糧をととのえているひまはなかつた。わたくしは、こう判断した。一〇〇〇人の人口が冬ごもりするのに、五日分や一〇日分のゆとりがなくて、どうするのか。しかも、われわれの必要量は、おおいとはいえ、その一日分にも足りないだろう。そのうえ、たとえわずかでも附近に耕地をもつてゐるこの町では、縣公署の手持ち食糧は切れてしまつても、どこかに品物はあり、品物さえあれば、購入の道はあるにちがいない。第一、初航船そのものが、そうとうの食料品をつんでゆくはずだ。この判断にもとづいて、われわれは、どうしてもモーホでは手にいりにくそうなものだけを、黒河で買ふとともに、救急品や乾パンなどは、あとから航空便でおくることをたのんで、とるものもとりあえず船にのりこんだのである。

た。

まず第一に、モーホの縣公署をおとすれでみると、あらかじめ江原の交渉もあって、すべては順調にはこんだ。食糧をはじめ、馬も馬夫も、必要なものは、みな手にはいるみごみがついて、ひとまずホッとした。モーホの食糧欠乏の話は、事情をしらぬ黒河の役人のとりこし苦労にすぎなかつたのだ。ただ、このあたりの馬には、駄載の習慣がないので、駄載用の鞍だけがなかつた。乗用の鞍をつかうほうが、あとでつぶしがきいて好都合だろうと考えていたが、それも借りることができなかつたので、荷物鞍をおおいそぎで造らせることになつた。

土地の人たちが、輸送についての話のたびに、問題にしたのは、ここでもやはり、馬糧のことだった。もつてゆく馬糧の予定量がすくないというのだ。草だけを食わしてゆこうというのは暴挙で、それでは馬がみな死んでしまうだろうともいつた。しかし、馬の数と馬糧の数量との堂々めぐりを知っているわれわれは、頑としてゆずらなかつた。けっきょく、ひとびとも、説得をあきらめたかたちになつた。

つぎにわたくしのおとすれたのは、警察本隊長だった。まだ長春にいたころ、なにがしという匪賊の頭目が、一〇人ばかりの部下をつれて、この山中ににげこんでいるといううわさをきいていたので、その状況をたしかめるのが目的であった。隊長も、そのうわさは知っていたが、われわれのゆく方面では、まず心配はなかろう、と語つた。話題は、モーホの町の治安状態にうつった。治安のよくないことは、事実であった。とくに冬の結氷期には、殺人や誘拐がひんぱんであるといふ。事件をおこしても、氷をわたつて対岸のソ連領にげこむ途があり、また日本人は、往々にして、対岸へ拉致されるおそれがある、ということであった。しかし、それらのことばから判断して、治安のわるいのは、金鉱町のなごりといふのではなく、むしろ、風雲急をつげる辺境の國境町の性格であり、しかも、日本人の統治にたいする反感のあらわれとみるべきであった。はじめからスペイのうた

がいの眼をもって住民に接すれば、いつかは全住民がスペイ化する日がくるのではなかろうか。

隊長は、われわれの隊に、警備をつけることをすすめたが、わたくしはそれをことわって、ただ通訳をひとりせわしてほしいとたのんだ。さいわい、日本語のじょうぶな警士がいるから、あす宿舎によこしてくれることになつた。

それから、さらに話はうつって、オロチヨンのことにおよんだ。隊長は、かれらが、ときどきこの町へも、毛皮をもつて、交易のためにあらわれてくると語つた。わたくしは、ふと思いついてきいた。

「いったいトナカイには、どのくらい荷がつめるのですか。」

「さあ、五—六貫はつめるでしよう。」

そのとき、わたくしの頭にひらめいたのは、馬のかわりに、トナカイを輸送につかえないか、という思いつきであった。そうすれば、馬糧のことについていわすらう必要もなくなるだろう。地衣類を主食とするトナカイを併用すれば、もつてゆく最少限度の馬糧の量も、うんとへらすことができるはずだ。しかも、トナカイをつかうことには、同時にオロチヨンをつかうことでもある。それは、オロチヨンの調査に、なによりも好都合なばかりでなく、かれらの生活手段である狩りは、食糧としてけものの肉を補給してくれるだろうし、もつともてきとうな道案内ともなるであろう。

「オロチヨンをやとう方法はないでしようか。」

と、わたくしはたずねた。

「そうですね。うちの警察官に、張貴堂^{ヤンケイダ}といふ、オロチヨン係りがいるんですがね。それにきけばわかるんですが……。ちうどいま、奥へでかけているんです。よろしい。お入用なら、さそくラオコウの駐在所に

連絡して、よびもどすようにはからってみましょ。」

「ぜひ、そういうふうにお願いします。」

もしこれが成功すれば、予想外の収穫だ。わたくしは、満足して宿舎にかえった。

隊員たちは、それぞれ活動をはじめた。町の事情にあかるい江原は、鞍や馬の調達にあたり、加藤は、食糧うけとりの手つづきや作業を、川添は、こまごました物品の買い入れをうけもつた。無電技士の本郷さんは、さっそく、本隊との無電連絡をこころみた。わたくしは、かたずをのんで、でっぷりとふとつた本郷さんの手もとをみつめた。この連絡の成功不成功は、探検の成否に關する重大問題であった。とうとう、本隊の電波は、レシーバーに断続音をたてはじめた。テストは、大成功だった。本隊は、予定どおり、ガン河ぞいに行進しており、基地に着くのは、一〇日ぐらいおくれるみこみ、とあった。基地でおちあう予定は、六月一五日ごろとなつていてから、一〇日おくれるとして、二五日ごろとなろう。場合によつては、もっとおくれることも考えて、こちらの食糧準備をすこし追加する必要があつた。基地までは、途中の滞在をふくめて二週間でゆけるみこみだつたら、本隊との会合までにはゆっくりすぎるほどゆとりがあつた。しかし、支隊のほうは、おそらく急速度で白色地帯を突破してくるものとみて、それよりはずつと早く基地に着いている必要があつた。わたくしは、いちおう、二八日にモーホを出発する予定を立てた。二八日までには、註文した鞍ができるはずだった。氣づかつていた、救急品や乾パンも、ぶじに飛行機で着いていた。計画は、ようやく軌道にのり、すべてのめんどうは、すでに去つたかにみえた。

もうひとりの隊員は、測量隊の松本さんである。四五歳くらいだが、年よりはふけて、好々爺という感じをあたえた。船のなかでは、釣り道具の手入れと釣りとに余念がなかつたが、上陸すると、さつそく活動にうつり、

滯在三日めの午後には、町はずれの丘におかれているはずの三角点をしらべに、ひとりででかけていった。ところが、かならず帰ると約束していった五時になつても、宿にすがたをみせない。五時半まで待つたが、まだ帰らなかつた。治安のわるいといふのが、どの程度かははつきりしないが、万一のことを考えると、すべてはおけなかつた。わたくしは、はじめて武器箱をあけ、拳銃に弾丸をこめた。弾倉に弾丸のおしごまれる音が、ちょっとしたスリルを感じさせた。拳銃ほしさにおそわれることを考えて、腰についたうえからレインコートをきた。とつさの場合は、ポケットのよこの裂け目からとりだすことができる。見つかっても見つからなくとも、一時間以内にはかえると、ひとり部屋にいた川添にいいのこして、宿をでた。ほこりっぽい、せまい通りを町のうらへぬけると、飛行場になつていた。その南は、耕地や湿地の原をへだてて、カラマツのおおつたひくい丘が東西に走つていた。三角点のあるはずの丘にけんとうをつけて、まっすぐにあるきはじめた。すると、いくらもゆかないうちに、ゆくて人にかけがあらわれ、ちかよってみると松本さんだつた。「やあ、どうもすみませんでした」とかれは恐縮したが、わたくしのほうは、一と安心するとともに、おおげさに心配したのがかえつて氣はずかしかつた。

そのあくる朝には、ひとりの若い警察官がわれわれの部屋に案内されてきた。隊長にたのんでおいた通訳だつた。まだ一八—九歳だろうか、こどもっぽい顔つきだつたが、はつきりした日本語で、「関警士です」と名のつた。いろいろ話したすえ、「銃器は?」ときくと、「騎銃をもつてゆきます」とことたえた。警察官の立場として、たとえひとりでも、われわれの護衛の役をひきうけようと、けなげな決心をしているらしかつた。のちに、護衛というよりはむしろマスコットのようになつた、この関さんをさいごに、隊員の顔ぶれもすっかりきまつたわけだ。

つぎの日は、準備のゆとりもできて、町をひとまわりまわってみた。金坑がおとろえてからは、この縣城も人口一〇〇〇にみたず、埠頭からの表玄関は、ちょっととりっぱだつたが、町の様子は、みるかげもない。ひくい屋根、せまい通り、ほこりの道、電燈もなく、まばらに開いた店にも活氣がない。人口をやしなうに足りないわずかの耕地と、これだけは豊富にあるが、はこび出しの不便な木材と、ほそぼそとした金坑のなごりとが、ようやくこの町をささえているのである。白系ロシア人を妻としている家庭がおおいというが、町にはそのすがたをみうけなかつた。われわれの宿舎は、ただひとつ日本旅館で、かなりおおきな建物のうち、あたらしく増築したばかりの、壁もまだかわききらぬさっぱりとした部屋が、われわれの本拠であつた。

その前夜、この宿のおかみさんが、わたくしのところにやってきて、すこしもじもじしたあげく、おもいがけなく、こうきりだした。

「あの、お茶道具をちょっと貸していただけませんでしょうか。」

わたくしが、毎夜、隊員たちをお客に茶をたててているのを、みていたのである。

「お使いになるのでしたら、どうぞ。」

おかみさんは、ことばをつけた。

「じつは、きょう近くの日本人の奥さんたち四一五人あつまつたので、あなたがお茶道具をもつてらっしゃる話をしたのです。そうすると、日本をはなれて何年ぶりかに、ぜひお茶の会をやってみたいという話がまとまりましたので、このようにおねがいにきたのです。」

「僕もなかま入りさせてもらえませんか。」

「とてもとても。みんなお茶なんかすっかりわすれてしまっているのですもの。」

とわらいながら、道具をかかえて、うれしそうに走りさつた。

朝になると、おかみさんは、にこにこしながら、道具をかえしにきた。

「いかがでした。」

「それがたいへんでしたのよ。」とおかみさんはまえおきして、つづけた。

「ひさしぶりで、みんなきちんとならんで、さてたてようと思ったら、お茶をさきに入れるのか、だれもわすれてしまっていて、すっかり大わらいしてしまいました。」

このとおい満洲の果てにまで、さまざまな苦労をかさねてわたってきた婦人たちにとって、昔ならいおぼえたお茶が、どんなに郷愁をそそったか、そして、おかしさと昔なつかしさに、眼に涙をうかべて笑いころげながら、ほろにがい感傷をおぼえたであろうありさまが、わたくしの眼にうかんだ。

鞍の完成がおくれて、出発はやむなく三〇日でのびた。ところが、そのひまを利用して、二八日に一同そろつて郊外に遠のりをこころみたとき、わたくしは、あはれ馬にのりそこのにて、したたか腰をうつた。宿にかえりついて、馬をおり、さてあるこうとすると、腰のうえに猛烈な痛みを感じ、自由に足をふみだすこともできなくなつたのを知つた。あくる日になつても、あいかわらず立ち居がままにならなかつた。このまま動けなくなつたことは思わなかつたが、長途の旅行にたえるかどうかおぼつかなかつた。責任のあるからだで、かるはずみな行動にでたことを、わたくしはひどく自責した。隊員たちの説得にまけて、わたくしはもう一日出発をのばした。そのかわり江原と加藤とが、予定の日にラオコウに先発し、オロチヨンやといいれの交渉にあたることになつた。チヤン・クエイ・タンが、きょうあすにもラオコウにかえつてくるはずだ、という連絡をうけていたからである。

ふたりの出発したあと、のこりの隊員は、あとかたずけに忙殺された。腰のいたみは、まだはげしかつたが、

がまんすれば、あるけないことはなかった。それに、だんだん快方にむかっているという自覚が、わたくしをよろこばせた。

三一日の朝、まだ暗いうちに、二三頭の馬と三台の馬車が、宿の裏門でひしめいた。二石六斗の米と、四四〇キロの白麵、それに乾燥野菜・パン類・テント・無電器材・大工道具・馬糧などが、馬のいななきと馬夫のかけごえとのさわぎのうちにつみこまれた。閲警士をふくめた隊員は、武装して、隊列の先頭から後尾までに、てきとうな間隔をおいて配備された。

「出発！」

きょうの行程は、ラオコウまで。モーホの街路は、まだほの暗かった。

第一歩

歩

町はずれの濕地をぬけるあいだに、夜はすっかり明けはなれた。しかし、行進は遅々としてはからくなかった。駄載になれていない馬夫は、荷のつけかたが下手で、たちまち荷物のすり落ちが続出した。馬二頭あたり一名の馬夫では、いちどずり落ちた荷物をもとにかえすのに、おそろしく時間がかかった。あわててつけなおした荷物は、しめかたがわるいために、またすぐすりおちて、よけいに時間を食った。ぬかるみにかかると、事態はいっそう悪化し、泥に足をとられた馬が、いたるところに立ち往生して、はいだそうとしてもがきはねるあいだに、荷物はせなかから廻轉して、よこ腹にひつかかった。馬車のわだちも泥にくいこんで、貧弱なからだの馬にとっては、ぬけだすのにひと苦労であった。まだ山にも入らず、本格的な濕地でもない町はずれでこの調子では

さきにはいったいどうなりゆくことだろう。



図 48. 峠のほこら.

それでも、どうやら濕地はぬけきって、山道にかかった。道は、カラマツの林をぬけて、だらだらと登つてゆき、地表はようやくかたく、隊の進行は、どうにか順調には立てはじめた。ゆるやかな波状地形をのりこえてゆく道の高みに立つと、木立ちの切れめから、すばらしい眺めがのぞいた。黒々と木におおわれた山なみの重なり、樹海ということばは、なんとよくこの森林帶の性格をあらわしていることであろうか。このながめこそ、大興安嶺の真價といふべきであった。わたくしは、行進も腰の痛みもわすれ、ながいあいだ立ちつくして、そのひろがりに見とれた。

尾根のカラマツ林のなかには、ところどころ大きな空き地ができるていて、そこを、大小の角礫が一めんにうずめているのが、注意をひいた。大きなのは直径一メートル以上、小さいのは五センチから一〇センチくらいの礫であった。この礫原との初対面は、本隊の隊員たちにたいしてと同様、わたくしにも、いろいろな疑問をなげかけた。

谷をよこぎるところには、ちょいちょい丸太づくりの小さな小屋がたつっていた。伐木の小屋でもあろうか。そういえば、道ばたの林にも、わりあい若木がおく、老樹は、まばらに頭をぬいている程度であった。そのあ

たりの峠には、小さい祠もたてられ、なかには、日本の峠の地蔵のまえによく見られるように、休み場所として腰かけまでそなえてあるのもあった。祭られているのは、山神^①、土地神^②、胡三太翁^③など、満洲の山間部に普遍的に見られる神々であった。

眼のさめるような肌色のシラカンバも、カラマツにまじっていた。尾根のカラマツの若葉のあいだに、あおあおとした葉をみせてるのは、シベリアアカマツの一と群れであろうか。まるでハイキングのように、景色をながめながら、坦々たる道をゆっくりとあるいてゆく氣分は、およそ探検という感じからは遠かつた。ただ、そのんびりした氣分をうちこわすものは、調子づいてかたわらを並んでゆく駄馬の列、車のひびきと、それからだんだん強くなりはじめた腰の痛みとであった。晝食のためひと休みしてからは、痛みはますますひどく、一と足ずつふみだすのにも忍耐を要した。馬車にものってみたが、でこぼこ道の振動が、いつそう腰にこたえるだけだった。それからあとは、もう景色を見る元氣もなく、ただのろのろと足をはこんだ。隊列は、つぎつぎとわたくしを追いかけてすすみ、とうとうただひとり取りのこされて、歯をくいしばりながらあるいた。休めばもう立ちあがれないかもしれないという心配から、腰をおろすこともできなかつた。こうやってあるいてさえいれば、いつかはラオコウにたどりつけるだろうというのが、ただひとつ希望であつた。さいごの何キロかを、どういうふうにあるいたかは、じぶんでもはつきりわからないが、気がついたときには、ラオコウ警察隊の門に立つていた。

門をくぐると、中庭いちめんに、われわれの馬車や馬がならび、荷物はおろされて、倉庫にはこばれていた。
一隊員にむかえられ、駐在の新井警士にあいさつし、荷物の整理をしばらくながめていたことまでは、おぼえているが、それからさき、部屋に通されたのも食事をとったのも、もはやおぼろげである。わたくし自身は、元氣そ

うにふるまつていたらしかつたが、一刻もはやく横になり、不動の状態で苦痛をやわらげることだけが、内心のねがいであつた。ただ、チャン・クエイ・タンがまだ帰ってきていないと聞いたことだけは、頭にのこつてゐる。

〔註〕

- ① 山神は、山の平和と狩獵とをつかさどる神で、一般に主神はトラだといわれている。しかし、小興安嶺東南部のトラの棲息地では、シナ人の獵師たちは、トラを山神爺とよび、山神と区別していた（一九四三年秋の森下・中尾の調査による）。
- ② 土地神は、五穀豊穣の神で、白髪黒衣の老爺としてえがかれる。
- ③ 胡三太爺は、一般に胡仙とよばれる。白ひげの大太爺、黒ひげの二太爺、ひげのない三太爺によつてあらわされる。胡仙は、胡・黄・白・柳・灰の五仙にわかれ、胡はキツネ、黄はイタチの一種の黄鼠狼、白はハリネズミ、柳はヘビ、灰はネズミの精であつて、いずれも豊饒利殖授子の神とされる。

最初のトナカイ・オロチヨン

眼がさめたときは、外はもうあかるく、かがやかい太陽の光りが中庭一めんにさしてゐた。腰の痛みはずつとすくなくなつて、この分ならまだあるけるといふ自信がわいてきた。そこへ、もうきちんと服をつけた閨さんがとんできて「オロチヨンがきています」と報告した。

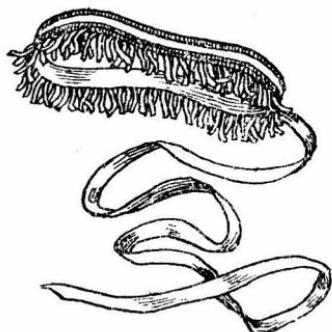
表へ出てみると、夫婦と子どもづれのオロチヨンの一家が立つてゐた。男は黄いろの上着にズボン、巻ゲートルのいでたちで、ゴム底のズック靴をはき、これがあの狩獵民族かとうがいたくなるような、一見町の労働者風であったが、コサック帽と肩からかけた小さい皮かばん、腰にさげた大型ナイフだけが、エキゾチックな感じをあたえた。妻は、頭を黄いろいプラトーグでつつみ、ひざまである外とうの下から、ひもでゆわえたなめし皮



図 50. トナカイ。

建物のうらにまわると、丸太を立てならべつた塀に、一〇頭ばかりのトナカイがつないで立つた。トナカイのくびや頭には、皮製のかざりあつた。(図49・50)をつけ、せなかには、前後のふちの突出したかわいい木鞍がおかれ、そのうえをシカの毛皮がおおっていた。からだは想像したよりも小さく、みごとな角をつけた雄で、鱗甲高一一〇セ

子をだいていた。母親にまつわりつくように、三人の子どもたちが立っていた。一三一四歳の女の子は、肩まで髪をたらし、ロシア風の青赤のいろどり美しい上衣とスカート、くびかざりをつけ、のこりのふたりの男の子は、つめえり服に皮ズボン、皮靴をはき、ひとりは防寒帽、ひとりは父親とおなじ型の帽子をかぶっていた(図版一四ページ、中段)。ツングース族特有の切れながの眼、とび出した額骨、黒い直毛やひくい鼻を見なかつたら、女や子どもたちの外見では、ロシア人の一家とまちがえそつであつた。男は人のよさそうな顔に笑いをたたえて、頭をさげ、子どもたちははにかんで、母親のうしろにかくれた。

図 49. トナカイのくびかざり
(ハンダハン皮製)。

ンチばかり、ほかのものは一〇〇センチ前後と目測された。ほかに仔が二頭、これはつながれもせず群れのあいだにまじっていた。

このオロチヨンたちは、モーウへでる途中に立ちよつたもので、主人の名はルカシカといつた。わたくしは、なんとかしてわれわれとの同行をなつとくさせようと決心し、きょう一日滞在ときめた。馬車だけはもう用ずみなので、モーウへの帰りじたくをはじめ、隊員はのどかな春の日をたのしむために、荷物の監視係りだけをのこして、自由行動をとつた。わたくしは、ルカシカとともに、村はずれに立ててあるというそのユルタをおとすれることにした。

駐在所の門をでてすこし下ると、砂と小石の川原のなかを、はば一〇メートルばかりの小川が、日にきらめきながらサラサラと音をたてて流れていた。ラオコウ河であった。川原に砂の小山がいたるところ起伏しているのは、かつての砂金採りのなごりであろう。いまは川に砂をあらう人かけもなく、つみ上げられた堆積も、流路の変化によって、ふたたび川のなかにけずりおとされ、あちこちでその断面をあらわに見せていた。一万ものひとびとの一攫千金の夢のあとには、ただ枯れ草や灌木が、いたずらにおいしげっているのみであった。

ルカシカは手に大なたをもち、せなかには長い旧式の銃をかけたまま、かるがると川をわたり、野地坊主をとびこえて、わたくしを案内した。腰の痛みのぬけきらないからだには、あとを追うのがひと苦勞であった。やがてカラマツの林があらわれ、低いイソツツジの下生えをわけて、すこし奥へはいると、そこの空地にユルタが立っていた。長さ四メートルたらずのほそい木を円錐形に組みあわせ、外がわを綿布でおおうただけのもので、入り口といつても、ただ骨組みにおおいをしていない部分というにすぎなかつた。中央には太い薪が何本もほのお金をあげており、それをかこんでユルタのふちに沿い毛皮がしかれて、かばんや包みなどが、その上におかれてい

木がわたされ、それから両端をかぎの手にまげた鉄棒がぶらさがり、その下端につり下げたやかんは、ちょうど火のまことに位置して、さを立てたモンゴル式のすわりかたになつた。く、ちょっと立つて座にかえったときは、片ひさを立てる。きちんとひざをそろえていたのが、注意をひいた。もつとも、家財といふほどのめぼしいものは見あたらず、わん類ややかん類のほかは、メリケン粉をこねるシラカンベの皮製の容器や、こなをのばすのにつかうらしいまるい木盤などが、眼にとまつたくらいであつた。⁽³⁾ 一一一日のかりのすまいと

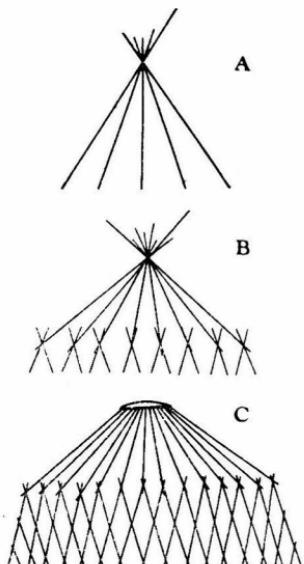


図 52. ヨルタの構造の複雑化の系列. A (円錐型), B (円筒円錐型), C (パオ型).



図 51. トナカイ・オロチョンのかりのヨルタの内部.

た。ヨルタのまんなかをよこぎつて一本の横木がわたされ、それから両端をかぎの手にまげた鉄棒がぶらさがり、その下端につり下げたやかんは、ちょうど火のまことに位置して、湯気をあげていた。ルカシカの妻は、小さいほうの子をつれてすでに帰りついており、ホウロウびきのわんに茶をついで、わたくしにすすめた。妻は入口からはいって左がわにすわっていたが、これがきまつた妻の座であるのかどうか。すわった姿勢が、日本人のよういつでもその姿勢でいるわけでもないらし

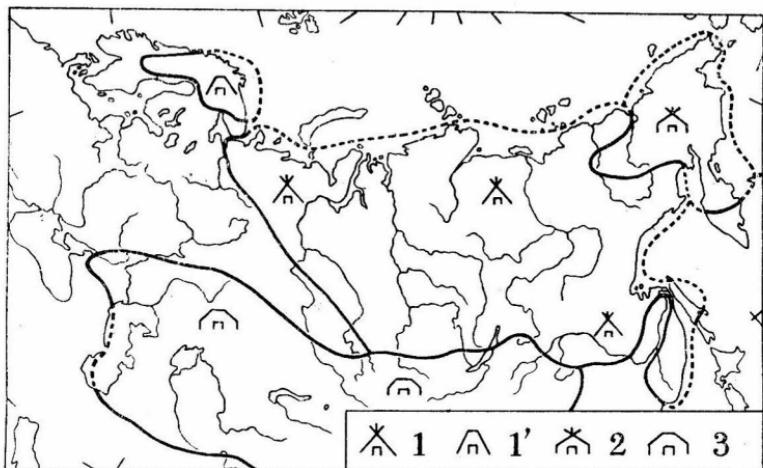


図 53. 北方アジアの移動民族の住居形態分布図. 1: 円錐型ユルタ, 1': おなじくラップ式, 2: 円筒円錐型ユルタ, 3: パオ型ユルタ. Buschan 1923 により一部補正.

いう点も手つだつてか、ユルタの印象はぜんたいとしてみずぼらしく、駐在所でみた女の子のはなやかな服装とは、およそそぐわぬものがあった。これにくらべると、おなじ移動式のすまいとはいえ、モンゴリアのステップにおける蒙古包のほうが構造からいっても、垂直の壁面をもつだけに、はるかにすぐれてしまつて、家具の豊富な点からいっても、ずっとゆう福さを感じさせる。

オロチヨンのつくる円錐形のユルタは、シベリアにひろく分布するツングース族のあいだに普遍的な住居の形式である。図53にみるように、その分布圏の南方は、モンゴル族やトルコ族のパオ型ユルタの分布圏に接し、東方はチュクチ、コリヤーク、サモエードなど、いわゆる古アジア族の円筒円錐型ユルタの分布圏に接している。円筒円錐型ユルタというのは、ちょうど円錐型とパオ型との中間型にあたるもので、円錐型のユルタを円筒型の台のうえにのせただけのものである。これのいっそう複雑化した形がパオ型であると考えるならば、円錐型—円筒円錐型—パオ型という住居型式の一連が、ここにできあがるわけである。ユルタ内の空間利用という見地からいえば、このうちパオ型がもっとも進んだ形であることは論をまたない

が、そうかといって、オロチヨンたちの移動生活にも、やがてパオ型が採用されるという可能性も、まずみいだせないであろう。なぜなら、つくりつけの骨組みをもちいるパオ型が、移動住居として役に立つためには、モンゴリアの草原のように、車を利用しておもい骨組みを、どこにでも自由にはこびあるくことができるという條件が必要であって、森林のなかでは、その運搬の困難をあえてするよりは、いたるところで自由に手に入る即席の材料を骨組みとして、從来どおりの円錐型ユルタをつくるほうが、はるかに移動生活に適しているといえる。してみると、たとえ見た眼には貧弱ではあっても、この形式の持続は、森林内で狩猟生活と密接にむすびついだ、いわばひとつの適應形態であると考えることができよう。⁽⁵⁾ 家具の貧弱さも、やはりおなじように、森林の移動生活につきまとう運搬の困難さと切りはなせないことがらであるとするならば、問題はむしろ、今までからが他の生活様式に接触する機会をおおくもちながら、なぜその「狩猟＝トナカイ飼養」による移動生活を、今日までもちづけてきたか、という点に帰着する。傳統がたやすくはあらためることのできないのはもちろんであるが、外の世界の変化にふれ、その影響をこうむりながらも、なおかつそれを持続できるためには、やはりそれをする可能にする條件の存在を考えなければならないであろう。この点については、のちに、もう一度ふれることにしよう。

ユルタのあたりでしばらく拳銃の試射をしてみたり、子どもと遊んだりしたのち、ふたたびルカシカとともに駐在所へと引きかえした。これからいよいよ、このオロチヨンを同行さず交渉をはじめなければならない。すこしなじみができるからと思って、朝のうちはわざと話をさしひかえていたのである。オロチヨンはロシア語をよく話し、われわれのつれてきた馬夫のなかのひとりもロシア語ができたので、関さんをよんで、二重の通訳で話をはじめた。ときどきは、まだるっこくなつて、わたくしの片言のシナ語と、おなじく片言のルカシカのシナ語



図 54. ラオコウの部落——モーホ共和国の末路。

とで、直接話しあつたりもした。かれは、なかなか承知しそうにもなかつた。家族をほつとくわけにはゆかない、というのである。わたくしは、家族はつれていつてもいいし、またここにおいてゆくなら、駐在所の新井警士に話して、困らないようにしておこう、と約束した。問答のすえ、やつとかれは承知し、家族はのこして、男の子ひとりとトナカイ七頭だけをつれてゆくことになった。七頭のトナカイでは、馬の数をへらすのにはたいして役に立たないけれども、すくなくともトナカイをつかう試験台にはなるだろう。それに、オロチヨンをつれてあるくことそのものに、なんとしても魅力があった。この交渉が成功したこととは、一日滞在のマイナスをつぐなつて、あまりあるものであった。

まだ日が高かったので、部落を一とまわりしてみた。はば一〇メートルばかりの道を中心にはさんで、三〇戸ばかりの家が両がわに立ちならんでいるのが、部落のほとんど全部であった。採金のさかんだったころの繁栄は、もはや見るよしもない。家々は、どれもおなじ平入りの切妻づくりで、かべは丸太を組みあわせ、そのうえに泥をぬってすきまをふさぎ、屋根は板ぶきで、高さはひく傾斜はゆるかつた。いまは、一二〇人ばかりの採金夫がここに住んで、附近の採金地にかけ、数名ずつ組をつくって、砂金を掘っている。掘った砂金は、ここのかね会社事務所で買い上げている。

はなやかなりし昔のなごりをとどめているものは、村の入り口の門と、その近くにある廟だけにすぎなかつた。

部落のうしろの丘にのぼってみると、山々はななめの日をうけて赤くかがやき、家々の屋根から、まっすぐに煙がたちのぼつた。ほとんどカラマツの切りつくされた丘のうえは、廣葉樹の若木の新緑と、ムラサキツツジの花にうつくしくいろどられていた。

〔註〕

- ① ハンダハンの皮に油をぬつて、足のかたちにぬつたもの。たびたび修繕しなくてはならないが、ひじょうに軽い。馬オロチヨンも、ほとんどおなじものを常用する。
- ② ホトカントよぶ。道をあるときは、これで、道の右がわの木になた目をつけてあるく。
- ③ もつとも、われわれが帰途に訪問した、長期滞在用のユルタには、もうすこし家財がゆたかであつた。そのおもなものは、これらのほか、ガラスゴップ、コーヒーティー茶わん、スプーン、アルミイト製食器、アルミなべ、フライパン、ハンダハン製はし入れ、金しゃくし、食事台、西洋ばさみ、鏡、木製物入れ、シラカンバおよびハンダハン皮のハンドバッグ（ドクトワリ）、ゆりかご（オムコ）、カレンダー、キリスト像などであつた。
- ④ 一ヵ所にすこしながら滞在する場合には、ユルタの骨組みのうえに、夏はぬいあわせたシラカンバの皮を、冬はハンダハンの皮をはる。また入り口には、下に板を立て、上には布をたらす。入り口の向きは、ねるとき頭の高くなるよう、川のほうにむけるという。
- ⑤ この点については、今西錦司・伴豊（一九四八）前出、二五一二九ページ、にくわしい。

行

難

行

難

ラオコウ街道をはなれて、山道にはいったとたんに、にわかじたての駄馬隊は、たちまち「馬脚」をあらわした。川をよこぎつて南方の山につづく軽濕地で、はやくも馬の足なみはどこおりはじめた。荷物をおとした一

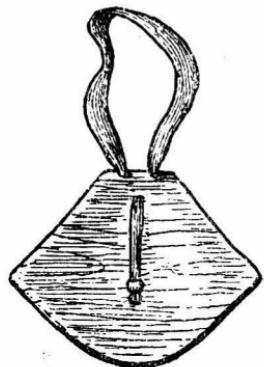


図 55. トナカイの鈴。
木製、鉛のたまを皮で両がわにつる
ひもす。

頭の馬が、やっとあるきはじめたと思うと、もうむこうではべつの一頭が立ち往生していた。二三頭の馬には、故障のたえまもない。とうとう一頭は、ふかいぬかるみに足をとられてすわりこんでしまった。総がかりで、おしたり引いたりしたあげく、やっと立ちあがらせて荷物をつけなおし、また行進をはじめるまでに、どれだけの時間がかかったことだろう。

このさわぎをよそに、トナカイの列だけは、くびにつけた鈴の音をひびかせながら、いとも軽快に湿地をとおりぬけていった。トナカイの背には、リュックサックや米など、四一五貫ずつの荷をつみ、一列につないで、ルカシカが先頭のたづなをひき、列のうしろに、かれの子どもがついた。仔ジカは、母シカによりそつて、かわいいかっこうで、おくれまいとついてゆく。草をわけ、ぬかるみをこえてゆくトナカイの足どりは、かたい地面をゆくときとすこしもかわらず、さながらすべるようだ。地面をぶみしめるとき、ふたつにわかれたひづめが、ぐつとひろげられて、泥にもぐることがすくないのである。トナカイの列と馬の列との距離は、みるとうちにひらいてしまって、すこしゆくごとに、行進をやめて待たせなければならなかつた。

登りにかかれば、すこしはらくになるかと期待していたが、こここの山道は、ラオコウ街道とちがつて、せまい、けわしいぬかるみ道だった。一度馬がすわりこむと、傾斜があるだけ、よけいぬけだすのに骨がおれた。見とおしのきかない林のなかのジグザグ道のあちこちに、馬はばらばらになつて引っかかっていた。尾根に近くなると、ようやくぬかるみは去つたが、こんどは、両がわにぎっしり生いしげつたカラマツやシラカンバの若木が、行進のじゃまをしはじめた。道がほそいために、ちょっとすすむと、すぐ馬の荷に枝がひつかつた。枝を



図 56. 漢河隊のはじめてのキャンプ。

きりひらくまに、うしろにはつきつぎと馬がつかえ、さきの馬があるきはじめると、こんどはうしろの馬が、べつの枝にひっかかった。ラオコウをでて、まだいくらもあるいていないのに、すでに馬はつかれきって、足どりはのろかった。まだ日暮れにはかなり間があるが、この尾根をこえた予定の谷までは、とてもゆきつけるみ込みはなく、この山腹でキャンプ地をさがさねばならなくなつた。航空写真にも、これといってよさそうな草地はみあたらなかつた。やがて、前方に、シラカンバのすこし太いのが、ひとかたまり茂つているのがみえ、近づくと、草地というほどにもあたらない、ちよつとした空き地があらわれた。ここを最初のキャンプ地ときめると、馬夫たちは、よろこんで荷をおろし、ルカシカは、トナカイをつれて、ハナゴケをさがしにでかけた。シラカンバの幹にかこまれたテントは、みた眼にはきもちよさそうだった。馬夫たちは、枝をなん本も地面にななめにつきさし、片屋根のすまいをつくつた。

夕食は、ジャガイモをおかずしに、せんぎり大根をたきこんだ味つけ飯であった。われわれは、主食こそ豊富にもつていたけれども、副食は、一俵のせんぎり大根がたのみの綱で、ほかに干魚やジャガイモなどが、わざかあるにすぎなかつた。調味料はいろいろそろえてあったが、もし野生動物があまりとれなかつたら、あらゆるくふうをこらし

て、せんぎり大根を調理する以外に、方法はないのである。さしづめ、きょうがその第一日だったが、そのかわり食後には、例のごとくようかんを出し、茶をたてた。関さんもようこんで飲んだが、ルカシカだけは、ちょっとなめて、浮かぬ顔だった。

馬夫たちには、ひとり一日分九〇〇グラムのメリケン粉を、塩や油とともに配給した。粉は、純白の一等白麺バイメンで、連中はおおよろこびだった。関さんは、じぶんから進んで、ひとり馬夫たちのところへ寝にいった。まだ気心のしれぬ連中の動向が、氣になつたのであろう。モーホでの人心不穏の話は、まだ耳のそこにこびりついていた、万一をおもんばかり拳銃をまくらもとにおいた。羽根のねぶくろに入れば、寒さを感じず眠りにいった。

夜があけると、小雨になつていた。炊事の煙は上つたけれど、しめつたテントのなかは、ぞくぞくと寒く、氣分はわびしくもうつとうしい。おまけに、馬が一頭ラオコウヘにげかえたらしく、とうとう一日滞在となつた。夕がたの無電は、支隊がいよいよ本隊とわかれて出発したことをつげた。われわれも、あまりぐずぐずしているわけにはゆかない。しかし、一日一〇キロにみたない行進が、これからもつづくとすれば、基地につくのはいつのことになるやらわからない。事態は、樂觀をゆるさなかった。

あくる朝は、天氣もよくなり、はやくに食事をすませたけれども、出発の準備がおくれ、出発は九時すぎになつた。馬夫の要領がわるくて、馬をあつめて駄載をおわるまでに、二時間もかかっているのである。荷物係りの江原が、叱咤激励したけれども、さっぱりきめがなかつた。しかし、きょうは、隊員ふたりにおのやのこぎりをもたせて先行させ、道の切りひらきをやらせたのがきいて、おといよりは、道のりがはかどつた。それでもやはり、荷物をおとして立ち往生するものが続出した。

ひるめしのとき、わたくしは、隊員の晝食用にとモーホで焼かせてきたロシアパンを、馬夫たちにも特配した。よろこんで食べおわるのをまって、かれらをあつめ、関さんの通訳で、どうして行進がはからぬと思つか、とたずねてみた。一同は、口々に、道がわるいとか、ひとりに二頭では手がまわらないとか、のべ立てはじめた。しばらくだまつてみんなの不平をきいてから、わたくしは、口をはさんだ。それは、みんなが助けあわないからだ、ひとりが荷をおとしてこまつていても、ほかのものは知らぬ顔をしているから、よけいに時間がかかるし、つみなおした荷物もひとりだからしめたが足りなくて、すぐおちるのだろう、というと、みんなはうなずいた。ほかの者のしごとに手をかさないのは、相手の面子メシツを立ててのことだろうが、いまの場合は、もとと協力してやらなければ、けっきょくみんなが困ることになるのではないか、と話してみると、馬夫たちはよく了解して、これからはそのとおりすると約束した。これが効を奏したのか、午後の行進は、すっとらくになつた。荷をおとした馬には、うしろの馬夫がはせつけて、ふたりで荷なおしをする光景もみられるようになつた。部落からとおさかって、伐採の手がとどかなくなつたせいか、若木がすくなくなつて、木の間隔もひらいてきた。このぶんなら、このさきもたいして心配はいらないだろう。わたくしは、内心ホッとした。

道は、尾根をくだつて、モトカシの谷に近づいていた。この谷をくだり、モンドリの谷との出合いから、峠をひとつこえたところが、第一目標である棲林集ナーリンジの部落のはずだ。しかし、夕がたちかく、道路の偵察にでかけていた川添がかえってきて、前方に修理を要する橋のあることを報告したので、谷にでないでそのまま荷をおろした。川添は、二三人の馬夫をつれて、あかるいうちにと、橋の修理にでかけていった。

チャン・クエイ・タン

つぎの朝、わたくしは、加藤や本郷さん、関さんたちと、キャンプのあとで焚き火をかこんでいた。駄馬隊はもう出かけてしまったあとで、われわれは、「四不像」をさがしにいった、ルカシカ父子をまっていた。スプシャン^(スブシャン)というのは、このへんのシナ人のトナカイにたいするよび名で、もちろん、ほんもののスプシャンのことではない。「スプシャン」どもは、夜のあいだに、ハナゴケをさがして、どこかへいってしまったらしい。

ルカシカののこしていった焚き火のうえには、やかんがかかっていた。そのかけかたは、すこしかわっている。まず四メートルばかりの細い木を切り、一端をななめに地表にさし、組みあわせた一本のほそい棒で、そのなかほどをささえ、つきだした他方の端を、焚き火のうえに出して、そこにやかんをかけるのである。立ち木をきりたおしたときは、こずえのほうの枝や葉をはらわずにおき、その重みだけでつりあわせて、地表につきさないこともおおい。これなら、長さも方向も自由に変えることができ、いかにもかんたんで、要領のよいやりかたであった。日本の山人がよくやる、三角形に木を組みあわせ、その頂上からやかんをつるす方法は、組みあわせがやつかいでひもや針金がいるし、両がわに石をきずいて棒をわたし、それにかける方法は、取りはずしが不便である、石や土でかまどをきずくめんどうをさけるとすれば、このオロチヨン式方法は、簡便さにおいて森林地方にうつてつけであろう。材料からいえば、日本の山でもじゅうぶん適用できるこの方法が、現に日本ではおこなわれていないということは、さきのユルタの形式の場合とはちがって、ただ、そのような傳統を日本では傳えていない、もしくはその方法をまなぶ機会がなかつたというだけのものではないか。このかんたんな一例のな

かに、ふたつの民族のもつ文化様式のちがいが見いだせるのは、なかなか興味がある。もし、われわれがこの方法を日本の山でもこころみ、山人たちにつたえたならば、それはしだいに日本でもひろがってゆくかも知れない。いわば文化の傳播に関するこの実験を、わたくしはちょっと試みてみたくなつた。これは、都會生活における衣食住の近代化の問題とはまたちがつて、原始文化の交流変遷に直接つながる実験になりそうに思われる。

とつぜん、朝のしづけさをやぶつて、銃声が林にこだました。すぐつづいてまた一発。方角はわれわれのやつてきたほうであるから、さきに出発した駄馬隊のはなつたものではない。大興安嶺にげこんだといわれる匪賊の話がちらと頭をかすめた。しかしそれきりで、林はふたたびもとのしづけさにかえつた。何者だろうかといいう疑念で、われわれはたがいに顔を見あわせた。そのとき逆の方向から、ルカシカがかえってきた。ルカシカも、いまの銃声をきいて「あれは、たれかがわれわれにむけてはなつた合図だ」と説明した。かれらのあいだでは、なにかの場合の信号用には、二発つづけて発砲することになつてゐるのだという。ル

カシカのすすめで、わたくしも拳銃をとりだし、空中に二発の銃声をひびかせた。

待つほどもなく、よごれた軍服にゲートルを巻き、警察官の略帽をかぶつた六〇すぎの背のたかい老人が、ひとりのオロチヨンとともに、林のあいだから姿をあらわした。オロチヨンは銃を肩にしていたが、老人は、雑の



図 57. 焚き火とチャン・クエイ・タン。

うを下げるだけの軽装で、わたくしのまえまでくると立ちどまり、直立不動の姿勢をとつて敬礼した。これが、われわれのさがしていた張貴堂警保であった。チャンさんは、奥地からこのオロチヨン（名をヤーゴといった）といっしょに帰り、われわれがさがしていたことをきいて、すぐあとを追ってきたのであった。わたくしはその労をねぎらって、われわれがオロチヨンとそのトナカイとをやとい入れたいと考えていることを説明した。チャンさんはヤーゴとなくか相談していたが、とにかくチーリンジまでゆけば、オロチヨンは集まつてくるから、そこまでいったうえで交渉してみよう、といった。ヤーゴは、モーホ方面のオロチヨンの頭目なのであった。

チャン・クエイ・タンの身のうえばなしは、フロンティアの歴史のひとこまとして、興味あるものがたりであった。われわれに問われるままに、かれは、そのあらましをものがたつた。かれは、ことし六二歳、河北省昌黎の農家にうまれた。一五歳まで、家の百姓しごとをしていたが、その年、商家の炊事夫にやとられて、錦州にうつった。二四歳で妻をめとつたが、四年で死にわかれた。三二歳になつたとき、金掘りをめざしてモーホにきた。錦州から黒河までは徒步、あとは船でようやくモーホにたどりつき、採金会社の廣信公司にやとられた。明國二年（一九一三年）のことである。そのころのモーホには、農民はひじょうにすくなく、もっぱら雑貨商がさかえていたというから、金坑への門口として、商業交易の中心をなしていたのであろう。もちろんこのときには、ジエルトウガ共和國はとつぐにほろびており、北清事変もおわったあとだから、ロシアがわとの交易はすくなく、雑貨はおもに黒河からはいっていた。採金会社にはいると、すぐラオコウへつれてこられ、ここで七年間金掘りをした。そのころ、ラオコウの住民は六〇〇—七〇〇人くらい、採金夫を主とし、そのほか雑貨商が七八軒、娼家が二五六六軒、女の人口は全部で四〇人くらいであったというから、村の性格はほぼ推察することができる。

一九二〇年になつて、チャンさんは採金夫をやめ、獵師に轉向した。そのころシナ人の獵師は一〇人おり、そのほか、ときどきリスとりをやる程度のものが十数人いた。ロシア人も、けものとりに入つており、その数も六七人はいたといふ。獵の中心地はラオコウ附近で、アカシカ、ハングハントなどを対象とし、ノロはまったくいなかつた。ただし、それ以前にはいくらかすんでいたが、オオカミによつて絶滅させられたといふ。もしこれが事実とすれば、興味ふかいことである。獵には、すべて銃をもち、弾丸はモーホで買うことができた。冬になると、リスとりにでた。リスとりには、チーリンジまでかけたが、かれは、おおいときで一と冬に三〇〇、すぐないときは一〇〇くらいはとることができた。ほかの獵師では、おおくて二〇〇くらいだったが、ただ姜樹槐という男だけは名人で、五〇〇もとつた。夏の獵高は、およそアカシカが一一二頭、ハングハントは三四頭から五頭くらい。賣り値は、リスが一頭一円八〇錢ないし二円、アカシカは二〇〇—三〇〇円、ただし袋角のおおきなのは五〇〇円、しつぽは二〇円くらい、皮は一〇円くらいに賣れた。ハングハントの皮は、二〇円くらいのねうちがあつた。このねだんで、さきのとれだかがあれば、獵だけでらくに生活ができる。

かれが獵師になつた年には、チーリンジにはシナ人の住むものもなく、ただオロチヨンだけの世界であつた。
 棲林^{チーリン}とは、オロチヨンを意味する。モーホ・オロチヨンの人口は、そのころ五〇人くらい、七八家族にわかれ、フェリーベというシャーマンが頭目になつてゐた。オロチヨンは、ひとり一と冬にリスを七〇〇—八〇〇もとり、モーホの永泰和という毛皮商へ賣りにきていたといふ。満洲國ができてから、かれは獵師をやめ、警察にはいつた。そのころ、山にあかるい警官は、かれのほかにふたりいて、事ある場合の道案内をつとめていたが、いまはそのふたりとも死んでしまい、じぶんだけが山に闘するしごとをうけもつてゐる、とチャンさんは話をむすんだ。



図 58. リスとりのわな.

いつのまにか日も高くなっていたので、われわれは、あわてて立ちあがった。駄馬の列には、まもなくおいたが、あるけどもあるけども、カラマツの林はつくるところを知らなかつた。もはや木はそれほど密生もせず、どこでもらくに馬が通れた。あおげば、若葉の枝のあいだからあお空がのぞき、幹や枝の影のこい地表には、イソツツジの葉が一めんにおおつてゐる。そのなかを、一とすじのほそ道がまがりくねつて、林のおくに消えていた。ちょうどどこの公園のなかを思わせるこの風景こそ、大興安嶺の典型的なカラマツ林であつた。

空き地があるなどおもうと、そこには切りたおされた木が横たわり、オロチヨンのユルタの骨組みがひとつ、ポツンと立つてしたり、あるいは、対子とよばれる小獸とりの古いわなが、朽ちかけたまま残つていていた。横たえた長い丸太のうえに二列に小さなくいを打ちこみ、そのうえにもう一本の丸太がかななつてゐるのは、リス用のわな、丸太が一本だけでその先端にくいを打ちならべ、おりをつくつてあるのは、テンヤイタチなどの肉食獣用のわなのなごりであろう⁽³⁾。しかし、あたらしいわなはついに見あたらなかつた。

われわれは、モトカシの川ぞいに下つてゐるはずだが、道は、谷そこの湿地をさけて、ゆるやかな山腹をとお

つており、夕がたになつて、やつと流れのふちにでた。きょうは馬の調子もよく、わたくしの腰の痛みも、ふつうあるいていてはほとんど感じなくなつていていたが、モンドリの合流点にはまだとおく、この夜もモトカシの谷に寝なければならなかつた。暮れがたには、微少なスカガの群れが、ひとりひとりをとりまき、露出した皮膚をおそつては血を吸い、われわれをなやました。

〔註〕

① ほんもののスプシャンといふのは、*Elaphurus davidiana* というシカで、シナ原産であるが、野生のものがほろびて數千年になるといふ、いまでは全世界にほとんどのこつていない。四不像の名は、蹄はウシに似てウシにあらず、頭はウマに似てウマにあらず、胴はロバに似てロバにあらず、角はシカに似てシカにあらず、という形容からでている。

② いまでは、二三年ごとに、選舉によつて決定される。

③ 小興安嶺地方のシナ人獵師は、前者、すなわち二本の丸太のあいだにけのをはさむ仕掛けを、チャオツトイ 槍子対とよび、後者、すなわち丸太と地面とのあいだにけのをはさむ仕掛けを路対ルートイ とよんでいる。前者では、上がわの丸太の一端をもちあげて、下の丸太をけものが走るときに落下する装置になつており、後者では、やはりおりに接したほうの丸太の端をななめにもちあげておき、おりの中のえさをけものが引くと落下するようになつてゐる。

チーリンジへ

今まで二日間、キャンプ地での馬夫たちの出発準備をみてきたので、そのてまどる原因がのみこめてきた。

そのひとつは、草をもとめて散らばつてゐる馬を、出発まえになつてから、あわてて集めにかかるからであつた。そこでわたくしは、朝おきるなり馬夫たちのところへでかけ、炊事に關係していない連中を、すぐ馬集めにやり、馬が集まると、さきに鞍だけをおさせた。食事がすむと、ふたりずつを一と組にし、荷づくりと荷つみと

を一頭ぶんずつ順番にやらせた。荷づくりを解いてない荷にあたった組には、かわりに、テントそのほかのあとかたづけをさせることにした。この方法の効果はてきめんで、いままで食後二時間もかかっていた出発準備が、

この朝は三〇分くらいですんでしまった。



図 59. モンドリの流れをわたる。

ふたたびカラマツ林の行進。チャン・クエイ・タンは、杖をひろって飄然とあるき、ルカシカは、にこにこしながらトナカイをひいてゆく。ただヤーゴだけは、むつりと、銃を肩に足をはこんだ。ひるにならぬうちにモンドリの谷にて、はば三〇メートルばかりの増水した流れをわたった。対岸は、一めんの野地坊主の原であった。馬オロチヨンの馬は野地坊主のうえでもわたつてあるくといわれているが、なれないわれわれの馬には、そんな器用なまねはできず、坊主のあいだにふみ場所をもとめて、ひと足ひと足ふみしめてわった。いまはまだ野地坊主のあいだに水もすくなく、土もわりあいにかたくて、たいしてもぐらすにあるくことができた。それでも、湿地のまんなかあたりまでゆくと、水たまりもあらわれ、野地坊主をふみはずすと、ひざまで黒い水のなかにおちこんだ。馬は難行したけれども、荷のつみかたがよくなつたので、荷をおとすものは、ほとんどなくなつた。野地坊主のうえには、あたらしい芽が、もうかなりのびていた。

濕地をわたり、森林の行進をおもつづけるうち、とつぜん林がとぎれ、ゆくての丘とのあいだの低平地に、おおきな、だえん形の雪田があらわれた。左右のひろがり三〇〇メートル、前後は一五〇メートル以上もあつたであろう。空はくもって、雪面の反射はひどくなかったけれども、暗色の木肌ばかり見なれてきた眼には、うちひらけた純白のながめが、はつとするようになさやかであった（図44）。ふみこんでみると、それは、雪というよりも氷にちかく、かたくしまったその表面は、靴のうらをはねかえした。まんなかまでると、はば一メートルばかりのみぞができており、すんだ水がなかを流れていた。雪面から水面までおよそ五〇センチ、水の深さもほぼおなじくらいと思われたが、底はまだ地表に達せず、あおい氷の色をみせていた。このみぞは、山腹からの流れ水の通路であろう。かえり道にもう一度この場所をすぎて、本隊員たちと意見をかわすまでは、この雪田の成因についてのはつきりした推定はできなかつた（二一八一一九ページ）。

雪田をすぎて、道はしだいに登りとなり、チーリンジ盆地への峠にかかつた。峠のちかくでは、林相がかわつて、シラカンバの若木がおおくなつた。展望のために、左手の高みにのぼつてみると、前年に測量隊のはいつたあとらしく、若木がいたるところ切りたおされていた。このあたりの高度は、八〇〇メートルくらいであろう。

山なみのしだいにひくまつてゆくはるかかなたに、アルベジハ河の谷にそつた、チーリンジの盆地がうちひらけている。ところどころ白く光るのは、沼か河か。盆地のつくるあたり、これをとりまいておりかさなつた山また山が、どんよりとくもつた空にとけこんでいた。

盆地に近づくにつれて、ふたたび平坦な森林がつづいたが、ところどころ根こそぎになつてたおれたカラマツをみうけた。風のためであらうか。その根系は、根もとからすぐ水平にひろがり、ほとんど地下にはもぐつていなかつた。凍土層が、垂直方向への根の発達をさまたげているのであらう。この原始林の木々が、あんがいに大

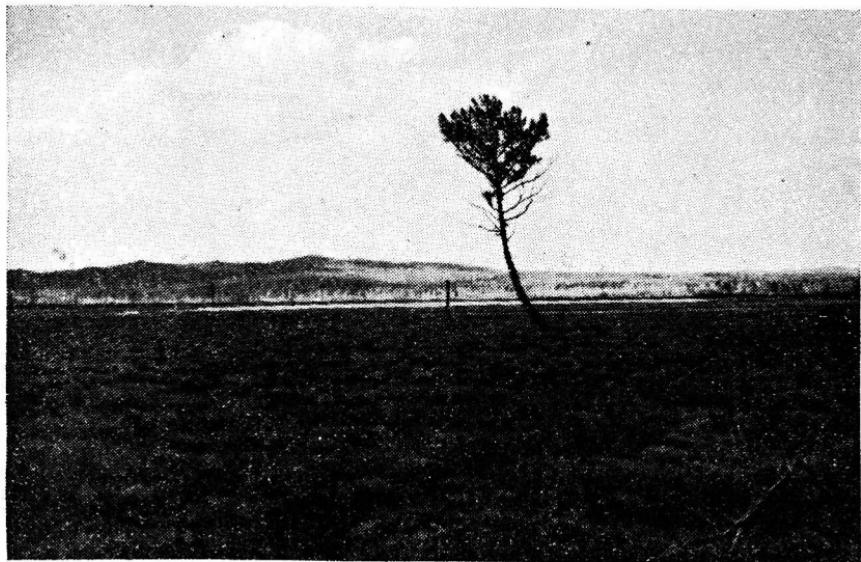


図 60. チーリンジ盆地。

木にとぼしいのも、この根をみれば、なるほどとうなずかれた。

やがて、忽然として視界がひらけ、ひろびろとした草原のまえに立った。原のなかには、カラマツの独立樹や、あるいは小さな木の群れが、点々と散在して、ながめの單調をやぶっている。地面はやや湿地性をあげ、かわいた、ひくい野地坊主のひろがっている部分もみられた。原の中央には、ちょっとした林がしげり、近づくと、その手前に、うつくしい三日月沼がしろくかがやいた。天候は回復し、夕ぐれの空には、白い雲がぽっかりと浮び、むらさき色にそまつた山々が、原のかなたにのびひろがっていた。数日を森林にあけくれてきたわれわれには、さながら別世界にてた感があった。

しかし、この絵のようなながめを、ろくろくたのしませてくれなかつたものは、ヌカガの大群であつた。大興安嶺の吸血性昆虫の先駆であるこの小さな虫の群れは、われわれの額のまわりをおしつつんで、ちらち

らととび交い、耳、くびすじ、のどなど、いたるところにとまつては血をもとめた。かゆさに耐えかねて、捕虫網を顔のまえにふりまわすのだけれども、虫の群れはいっこうにへる様子もなく、はてはあきらめて血を吸わせるままにした。アブとちがって、痛みのないだけはましであった。

まもなく耕地があらわれた。かわいた野地坊主の濕地に接して、あさくすき起された土の列が、ひろい原野に長々とつづいている。そのような列があちこちにあらわれ、そのむこうに、木柵と人家の屋根とが、小さく眼にうつった。これが、大興安嶺のなかに、もともとおく深くはいりこんだ農業部落、チーリンジの村であった。

トナカイ・オロチヨンの墓

チーリンジの草原にでるすこし手前で、道からちょっとはずれた林のなかに、ふと異様なものが眼をひいた。地面のうえに、板で長さ二メートルたらずの切り妻の屋根をつくり、その一端に十字架が立てられていた。十字架には、ななめのみじかい横木がそえられてあつたから、それは一見してギリシャ正教徒の墓だとわかった。チヤンさんに聞くと、オロチヨンの墓だといった(図版一四ページ)。トナカイ・オロチヨンたちは、すべてギリシャ正教に帰依しているのである。

もともと、トナカイ・オロチヨンは、昔からの大興安嶺の住民ではない。ヤーゴたちの話では、いまから一〇〇年ほどまえ、祖父の時代に、マカルフという頭目にひきいられて、シベリアからわたってきたものであるといふ。その原因は、シベリア開発にともなう、けものの減少であったと思われるが、そののちも比較的最近にいたるまで、シベリアとの往き來は、しばしばおこなわれていた。たとえば一九一〇年のアマザール河地方よりの六

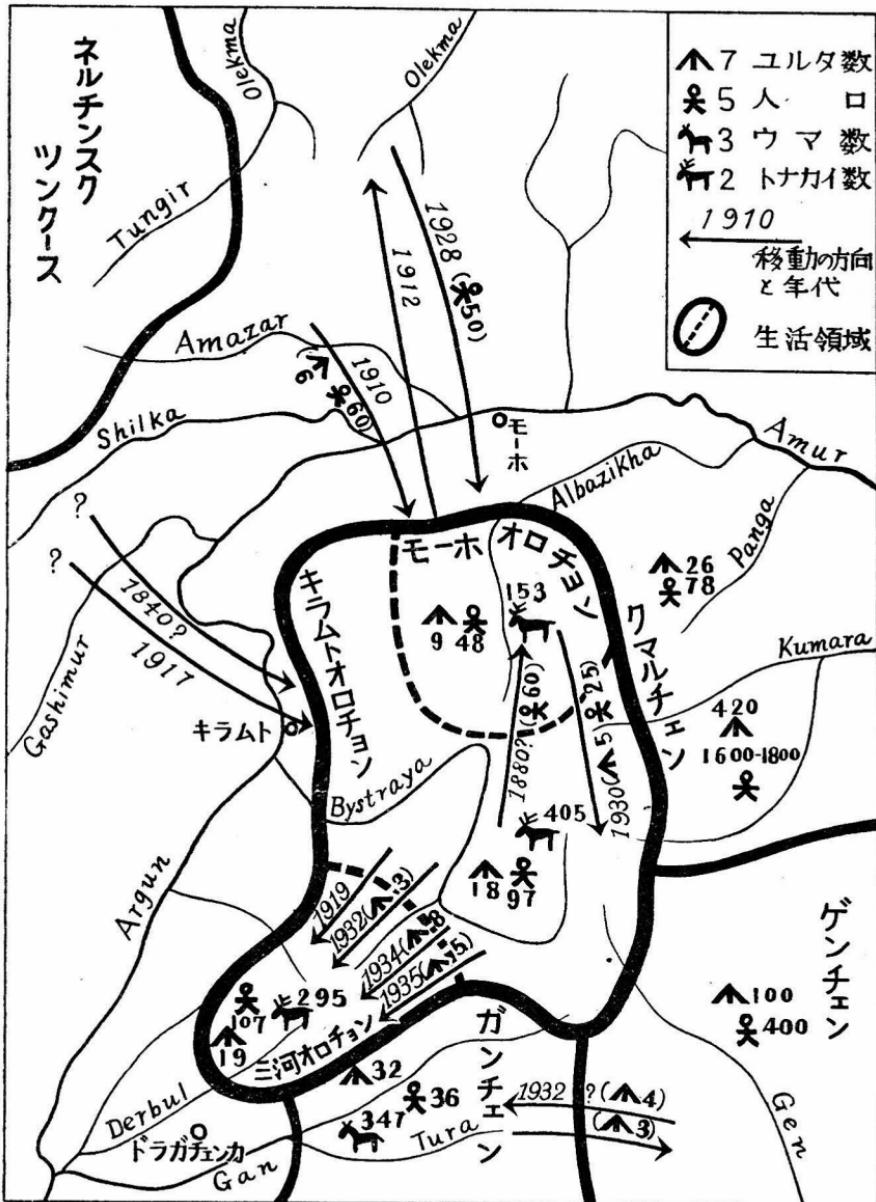


図 61. トナカイ・オロチヨンの動態図 (おもに1938—39年の治安部調査と、われわれの調査とによる)。

○名の渡來、一九二八年のオレクマ河地方よりの五〇名の渡來など。こうして現在では、大興安嶺の中では、デルブル河の上流からビストラヤ河流域、アルバジハ河の上流地方にかけての、およそ六万平方キロの地域に二五〇名ばかりのトナカイ・オロチヨンが、九〇〇頭ばかりのトナカイとともに、モーホ、キラムト、三河の三集團にわかれて生活しているのである。平均すれば、一〇〇平方キロに対して三人足らずの稀薄な人口密度である。シベリアにおけるかれらの生活には、いつとはなくロシア風の様式がはいりこんでいた。女の上着、ブラウスやスカート、頭にかぶるプラトーカ、男の着るルパシカや背廣などにとどまらず、食事においてもパンをたべ、紅茶をするなど。政治的には、ちょうど馬オロチヨンが清朝から旗組織をあたえられたように、トナカイ・オロチヨンはロシア人からアタマン組織をあたえられ、宗教的にも在來のシャーマニズムにかわって、あるいはそれと平行して、ギリシャ正教がゆきわたってきたのである。⁽³⁾ これらの新らしい生活様式は、かれらの移住とともに、そのまま大興安嶺のなかにも持ちこまれ、シナ人との接触がはじまつてのちも、ロシア語、ロシア文字などとともに持ちつけられてきた。われわれがみた墓も、在來の風葬にかわって、このように新しく取りいれられたロシア文化の影響をしめすものであった。

しかし、このような外見的な変化にかかわらず、かれらの基本的な生活様式、すなわち「狩猟＝トナカイ飼養」という面では、たとえシラカンバの弓矢が銃にかわったにせよ、根本的には、なんの変化ももたらなかつたところだろうか。かれらの同族の一部、たとえばザバイカルのツングース族は、すでにモンゴル化あるいはロシア化して、遊牧または農耕生活に轉向しており、満洲でも、ノンニの河谷に住むソロン人は、いまではすでに農耕を起こない、あるいは急速に農耕生活へ移りつつある。さらに、西ホロンベイルに住むソロン人は、モンゴル人の影

響をうけて遊牧生活に移行し、狩猟はもはや附帶的なものになってしまっているのである。それにもかかわらず、大興安嶺のオロチヨンはもとより、シベリアにおいてさえ、バイカル湖附近からヤブノロイ、スタノヴォイをへて、カムチャツカの山地にいたる廣大な地域に、トナカイ飼養＝狩猟の世界は、いまなおツングース族によつてくりひろげられているというのは、やはりこれらの地域に、この生活様式の維持につどうのよい、あるいは他の生活様式の採用を困難ならしめるような條件が、存在していると考えないわけにはゆかないであろう。

その條件のひとつは、自然環境であると考えられる。これらのトナカイ飼養＝狩猟の世界が成立しているのは、ツンドラ的な植物景観をふくんだ森林帶を主体としており、ここには、ツンドラからひきつづいて地衣類がおおく自生してトナカイの飼養を可能にするとともに、ゆたかな森林の野獸類をもつて狩猟生活にも適している。しかも寒冷な氣候は、安定した農耕生活には不向きである。一方、森林と地衣類との共存は、ツンドラ地帶に見るようなトナカイの大規模な放牧だけによる生活をも困難にしている。いいかえると、かれらのトナカイ飼養＝狩猟の生活こそは、この地域の自然環境にもっとも適應した生活様式であり、この地域にとどまるかぎり、たやすくは他の生活に轉向しがたい性質のものと考えることができる。

條件の他の一つは、外部世界の入りこみかたである。ロシア人との接觸は、かれらに貨幣をおしえ、メリケン粉や衣類をおしえ、かれらの狩猟を、直接的な生活必需品の生産から轉じて、貨幣獲得の手段に變化させた。こうしてかれらは、自給的な閉鎖社會から一轉して、商品としての毛皮生産者になつたけれども、その貨幣獲得は、單に日用品の購入を目的とするにとどまり、貨幣の蓄積それ自体を問題とするところまでは到達できなかつた。かれらの財産は依然としてトナカイであり、貧富の判断はその頭数によつて決定される。このことは、ひとつには、商品生産を含めてのかれらの生活が、トナカイに依存すること大であるにもかかわらず、外部の世界か

らこれを買入れることが、不可能もしくは困難であったことにもとづくのである。それにまた、毛皮を生産しさえすれば、從来どおりの生活様式が若干のうるおいまでつけて維持されるかぎり、貨幣に対するそれ以上の魅力もなく、いわんやこれをもとめて、危険をおかしてまちがった生活様式を採用しようとする意欲は出なかつたであろう。またこの問題には、さらにべつの條件がつきまと。すなわち、かれらの生活地域は、農業不適地であることを関連して、鉄道そのほかの交通網の発達がさまたげられ、林業などの産業の發展もおさえられている。これは、かれらの生活環境をもとのままに保存するとともに、ほかの多様な生活様式との接觸の機会をすくながらしめている。かれらのおもな関心は、トナカイの数の維持と、野獸の減少とにそがれるだけで充分であり、かれらの知らない世界に組みたてられている經濟機構が、毛皮の商品價値を他の物資にくらべてひどく低落させないかぎり、その生活は満足におこないうるものであった。野獸の減少した場合でも、ちょうど滿洲へ移住してきたときのように、同様な條件の土地を新らしくさがすことによつて、これまでどおりの生活を維持することも、場合によつては可能であった。

このようにみれば、かれらの生活様式を変化させることのできるものは、さしあたり、さらに強力な外的條件の変化のなかにもとめなければならぬであろう。森林の開発や、いっそう精巧な銃器の供給などによる野獸の減少、なにかの原因によるトナカイの減少や經濟機構の変化など、これらの現象が狩猟による生活の維持を困難ならしめるまでは、オロチヨンたちは、依然としてタイガを舞台とし、農耕社会や遊牧社会と肩をならべて狩猟社会を開拓し、これらの社会とたがいに地域をすみわけることによつて、それぞれの土地利用の役わりをはたしてゆくであろう。たとえ狩猟による土地利用が、いかにも低能率であることは否定できないにせよ、他の方法が発達する道がひらかれるまでは、それがやはりこの地域においてもともふさわしい、最高度の利用方法をとつ

ている人間のいとなみである、といわねばなるまい。（以上一〇節 森下）

〔註〕

① われわれが、かえり道にみたオロチヨンのなかには、ストッキングとハイヒールとをもつてゐる娘もいた。女の衣類は、ふつうじぶんでしたてる。女たちは、ぬいものがうまく、手藝にもたくみで、一四一五歳の娘時代から、衣類をして、しゅうをする。なお、冬の衣類だけは、ほとんどハンダハン皮製で、綿服はすくない。頭には、ハンダハンの耳でつくった防寒帽をかぶる。

② オロチヨンたちは、キラムトへでて、牧師から洗礼をうけ、クリスチヤン・ネームをもらう。ユルタごとにキリストの額をかざり、朝夕十字をきつて礼拜する。

チーリングの生態

タリシング 横林集の村は、四戸からなっていた。ほかに空き家が二軒、それに警察隊の倉庫があつて、これをわれわれの宿舎にあてた。四戸のうち「張」「孫」および「郭」という三人は独身で、「方」だけが妻と子どもふたり、やとい人ひとりの五人ぐらしあつた。方の妻はロシヤ人とシナ人との混血である。開拓のはじめから住んでいるのは方だけで、ほかはあとからの参加者であつた。

耕地は、全部で七天地半あつた。^① このうち、方は二天地半をもち、張壌修は三天地、孫と郭とはふたりいつしよに二天地を耕作している。しかしこのうちで、耕地をじぶんの所有にしているのは方だけで、あの耕地は、すべてモーホにいる張学明という男の所有である。というのは、ここを開拓者は張学明と方とのふたりだったので、だれにも属しないこの土地は、ひとりでにふたりの所有となつた形であつた。

おどろいたことには、この地主の張学明が、われわれのやとってきた馬夫のひとりであった。ロシア語がで
き、チーリンジへの道を知っているといった老人の張チャヤンがそうであった。おなじ老人であるチャン・クエイ・タン
と区別するために、かれの通称にしたがって、老頭兒ラオトルとよぶことにしよう。ラオトルのものがたる身のうえはな
しは、そのままこの村の成立の歴史であった。

ラオトルは、もともと天津の西方の百姓の子にうまれたが、一八歳のときから大工をならい、二九歳から三〇
歳まで天津の町でそれによって暮らしをたてた。そののちハルビン、ハイラルをへて満洲里にゆき、五年あまり
やはり大工で生活していたが、そのころモーホの対岸のイリフリに住んでいた同郷の者から、大工不足だからこ
ないかというさそいをうけ、シベリア鉄道経由でやってきた。一九一八年のことである。一九二〇年になって、
かれはモーホにうつり、山中を砂金をさがしてあるきはじめた。ゴールド・ラッシュにいたたまれなくなつたの
であろう。足を棒にしてあるいたかいがあつて、かれはとうとうひとつ砂金坑を探しあてた。チーリンジに近
いターリンホのほとりの、連盛溝金坑である。かれはさっそく廣信公司にとどけ、人をやとって金掘りをはじめ
た。しかし、なによりの障害は、この山中に食糧を輸送することの困難さであった。そこでかれは森林帶の中
で、金坑近くにめぐまれたこの沖積盆地に眼をつけ、そのころまつたくの原野であったチーリンジに、耕地を開
拓しようと決心した。百姓の家にうまれたことが、この決心にあすかつて力があったのであろう。あくる一九二
一年、かれはこの草地に最初のくわを入れ、以後夏だけここで開墾に従事することにした。ややおくれて、おな
じ採金なかまの方が、これにくわわった。二年たって、ラオトルは金坑を廣信公司の手にまかせ、モーホへ引き
あげたけれども、夏の耕作だけは継続した。金坑を放棄したのは、おそらく採金高と金價格との関係から、經營
がむずかしくなつたためであろう。

チーリンジ附近は、モーホ・オロチヨンの集合地であった。チーリンというのは、もともとオロチヨンをさすシナ語である。かれは、必然的にオロチヨンとも交渉をもちはじめた。シベリアでロシア語をおぼえてきたことが、この場合に役に立った。かれはオロチヨンから毛皮を買い入れ、メリケン粉・茶・塩・布類などを賣りつけた。そのころハンダハンの皮一斤について、一円で買ったということである。この新らしい商賣はかなりながくつづき、そのあいだに妻や子どもたちを郷里からよびよせることもできた。しかし一九三四年、満洲國の行政組織がこの山奥にまで滲透して、オロチヨン相手のかつてな交易ができなくなつたために、ついにかれはチーリンジの耕作をも放棄して、モーホで買った農地での生活に専心するようになつたのである。チーリンジにおけるかれの耕地の一部は、おなじくオロチヨンとの交易のために、一九二三年以來ここにうつり住んでいた張壤修がひきうけることになつた。張壤修は、ここにくるまではモーホで農業をやっていた経験者であったから、オロチヨンとの交易が禁止されたのをしおに、ふたたび百姓しごとにかえることにしたのである。もうひとりの住民である郭は、一九二九年からやはりモーホで百姓をしていたが、一九三五年以來ここに移り、張學明ののこりの耕地を借りうけて農業をつづけ、孫がこれにくわわつたものである。これらの住民のほか、一九三三年にモーホからひとりで移ってきて、半農半獵の生活をしていた王惠德という男がいたが、けものが少なくなつたために、ふたたびモーホに引きあげてしまった。なおそのほか、ニコライというロシア人も、一九三六年から二年間、ここで農業をいとなんでいたということである。

ラオトルは、このようにチーリンジから去りはしたけれども、土地の所有者であるといふ關係から、それ以後もときおりここをおとずれていたようである。かれがみずから進んでわれわれの隊の馬夫にくわわつたのも、このようなチーリンジとの結びつきからであった。現在はまだ耕作のおよんでいない土地も、やはりじぶんの所有

であると、かれは考へてゐるらしく、ほかの者もこれをみとめてゐる。しかしながらには、それはやはりはじめて開墾する者の手に帰するはずだ、と主張するものもあって、その所有権は、かならずしも確定してはいない。

これらの村の歴史を通じて、興味のあることは、チャン・クエイ・タンの場合もそうであったように、ひとびとが、いともかんたんにしごとを変え、すまいをうつしているということである。それは、金坑の衰微、金の價格の下落、政治的な強制力などの、直接の結果であるにはちがいないが、やはりフロンティアの開拓民のひとつ性格のあらわれであろうとおもわれる。村の成立そのものも、はじめから、採金・交易・狩猟などの、ちがつた世界との結びつきから出発しており、じゅんすいの農村というよりは、多角的な、もしくは中間的な性格をもつてうまれてきたものである。そして、変動性にとんだ、これらの奪略産業との結びつきは、できあがった農村自体の安定性をおびやかし、ひとびとの移動をも、ますますおおきくしてゐるのである。これも、農業限界地域としてのタイガのもつ、ひとつの性格であろう。

チーリンジの農業は、およそ穀物栽培の経済的に成立しうる最低の気候的條件のもとにおこなわれてゐる。ふつうの年には、四月にはいるまでは、アルベジハ河のうえをそりが自由に通れるし、終霜は五月にはいつてからである。五月下旬になつて、耕地の表土はようやく一尺ばかりとけ、はじめてすきおこしができるようになる。だがやした土には、コムギ、ジャガイモをまきつける、六月にはいるとエンベクの種まき、そして収穫は、八月下旬にエンベクとジャガイモ、九月上旬にはコムギ。もう九月にはいれば初霜をみるようになる。やがて中下旬ともなれば初雪、そして池などには氷がはりはじめる。一一月中旬には、河も完全にこおり、そりもとおれるようになる。冬の積雪は五〇センチぐらいである。無霜期間は、わずか一一〇日にも足りない程度であり、しかもこのような寒冷地域では、ちょっととした氣温の変動でも、農作には致命的な影響をあたえる結果となる。たとえ

ば、昨年も七月中旬になつてから晩霜にみまわれ、コムギやエンベク、ジャガイモにまで被害をうけ、一昨年もおなじころに軽くこおつたので、方の畑では、この二年間コムギはほとんど収穫できなかつたといふ。

土地はもちろん、永久凍土層の分布地域内にあるから、氣温の上昇とともに、表面がわざかにとけるだけである。夏になつて凍結のとける深さは、野地坊主に水のたまつた濕地で六〇一九〇センチ、水がなければ九〇一一二〇センチ、かわいた草地で一二〇一五〇センチ、耕地で一八〇センチ、われわれが到着した六月はじめでは、耕地の下一二〇センチくらいまでは、まだこおつてゐるといふ話であつた。もっとも、地表に草のおおいがなければ、夏は三〇〇センチくらいまではとけるといふ。

このような氣候條件のもとでは、作物の種類もおのずから限定されてくる。穀物では、シベリアと同じく、コムギとエンベクとの組み合せ、ほかの主食としてはジャガイモだけで、そのほかにアサ類がすこしと野菜類。野菜の種類はかなりあって、ダイコン、ハクサイ、ネギ、ニラ、ホウレンソウ、キュウリ、トウガル、エンドウなどが栽培される。一天地あたりの平均收量は、コムギで六〇〇斤、エンベクで一〇〇〇斤というから、換算すれば反あたりコムギ三斗、エンベク五斗ばかりにすぎない。

耕地は、野地坊主のある地面をえらんで開墾されている。ラオトルの話では、野地坊主の土は色も黒く、粒もこまかくてよい土であるし、開墾の労力もすくなくてすむといふ。もともとわずかの家畜頭数しかもたなかつたかれらには、この労力の問題は重大であつたにちがいない。四軒あわせて馬は五頭、ニワトリ三〇羽、ブタ四頭、イヌ二頭、ガチョウ一羽というのが、現在の総家畜数であった。そして、この家畜数の不足のために、開墾しうる余地をじゅうぶんにもつて盆地で、かれらは、わずか七天地半の耕地をそれ以上ひろげることもできず、やもすれば、食糧の自給さえもおぼつかない状態においこまれてゐるのであつた。ラオトルが開墾に成功したの

は馬四頭をもつていたためであり、馬をもたなかつた方は、おくれてはいり、それもいまでは、その生活の維持すら困難になつて、この冬はモー^ホへ引きあげる決心さえかためるにいたつてゐる。じつさい、二年つづきの不作に、方はモー^ホまで食糧配給をうけにいって、ようやく露命をつなぎ、この冬は馬にも洋草だけしかくわすことができなかつたのである。

この地の耕作は、つぎのとおりにおこなわれる。まず五月の中下旬ごろ、凍土が三〇センチばかりとけると、犁を用いて耕地をすきかえし、それがおわると杷を使つて草をのぞく。これは矩形に組みあわせたわくの長辺に、長い釘をそれぞれ一列に立てならべた、

一種のハローである
(図62下)。除草がすめ

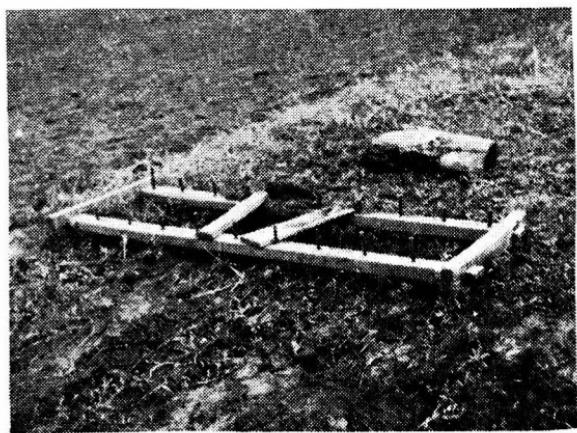


図 62. チーリンジの耕作。

上(ラオの使用), 下(杷).

ばすぐ種まき器で種をまき、おればラオで土をかぶせる。ラオは、種まきまえの地ならしにも、まいたあとで、くしのような形をし、その歯にあたる

部分がヤナギの枝でできている(図62上)。これらの農具は、すべて馬にひかせるが、犁は馬二—三頭びきで一天地に一日かかり、杷は三頭で一天地一日、ラオは一—二頭で一天地半日たらず、全過程はほぼ三日で、コムギ、エンベクともおなじである。われわれが到着したときは、コムギがすみ、エンベクのまきつけ時期であつて、三頭びきの杷やラオを、ひとりが馬の口をとり、ひとりが農具のおもしに乘るか、またはかわりに石をつんで、しごとにはげんでいた。

芽がでてからは、鋤頭ツイヅウと名づける金属刃の除草具で、雑草とりをする。これは人力でやるので、ひじょうな労力を要し、一回の草とりに一天地六—七日もかかる。

こうしてコムギ、ジャガイモ、エンベクとひととおりの種まきがおわれば、收穫までのあいだに、冬の飼料にそなえて草刈りにかかる。草刈りは、鎌刀シャンダオという大鎌をつかい、ひとりで一日に五〇—六〇ペード(七五〇—九〇〇キロ)ぐらい。かりとチヤズてから釵子チヤズでかきあつめ、日に干し、かわいてから束にしておく。

またたくまに收穫期がくる。八月すぎから九月のはじめにかけて、ジャガイモ、エンベク、コムギなどほとんどいっしょである。穀物の刈り取りには、鎌刀といふ鎌をつかい、一天地に四—五日はかかる。刈ったものは、たばねて地面にひろげ、一〇日ほどかわかす。かわけば、クンズというローラーを使って脱穀する。これには、馬を一—二頭で一天地分四—五日。おわれば麻袋につめて、これでひとまず完了する。これが一〇月なかばごろである。とり入れがすむと、あとは冬しごとである。枯れ木をのこぎりでひいて薪にし、雪のあるときにそりではこんだり、とおくの乾草をはこび入れたり、コムギ粉を磨モブといふうすでひいたりする。

このように、夏がみじかいため、わずかの耕地であるにもかかわらず、しごとはひじょうにいそがしい。人手も足りず、馬も足りないとすれば、耕地をふやすことは望むべくもなく、それがまた制約となつて、家畜をふや

すことがむずかしい。冬は、雪のために、家畜を放牧できないので、飼料を多量にたくわえておかねばならないからである。

こんなにおしつめられた、あわれなチーリンジの農業を、わずかにささえているものは、ちょうどその成立のときにもそうであったように、この附近におけるほかの産業である。ラオトルの発見した連盛溝とおなじタリソホの河すじに、オロチョンのサンカが発見したといわれる富克山金坑では、いまおよそ八〇人の採金夫がはたらいでいるほか、この附近には、かなりの森林伐採人夫もはいりこんでいる。木は、いかだにくんで、アルベジハ川を流すのである。伐採人夫たちは、エンベクや洋草を高價に買い入れる。昨年郭は、エンベクを一プード六円で七一八袋、洋草を一プード八〇錢で二〇プードも賣った。金坑のほうではまた、ジャガイモや野菜などの需要がおおい。方は、ジャガイモを一プード六一七円で四〇一五〇プードも賣り、ハクサイもおなじ値で一〇〇プード賣りつけた。卵も一個四〇錢で、年に一〇〇一三〇〇個賣っているのである。昨年は、ブタも賣った。収穫のとぼしさを、なんとかおぎなって、かれらの生活を維持しているのは、毛皮がなくなつたのちのいまでも、やはり砂金や木材であった。そして、これらの変動性のおおい不安定な産業にささえられた投機的な性格こそ、タイガの農業の特色ともいふべきものであった。(森下・川喜田)

〔註〕

- ① 一天地は、およそ〇・六五ヘクタール。
- ② 二斤は一キログラム。作付面積のわりあいは、方の畑で、コムギ一天地、ジャガイモ半天地、エンベク一天地、張壤修の畑では、三種それぞれ一天地ずつであった。
- ③ イネ科、カヤツリグサ科の草本でつくつた乾草である。

うたがわれた日本人

六月七日から九日まで、われわれはチーリンジに滞在した。村の調査のほかに、オロチョンやとい入れの問題があつたからだ。わたくしは、ヤーゴやルカシカにたのんで、オロチョンたちが通りかかったら、すぐつれてきてくれとたのんでおいた。

到着のあくる朝、村をひとまわりしてかえってみると、もうちゃんと、ひとりの中年のオロチョンがあらわれていた。背がたかく、こわい顔つきで、戦闘帽に作業服をつけ、ひざのうえからひもで腰につるす皮のものもひきをはき、そのうえにゲートルをまいていた。これが、れいのフクシャンの金坑をみつけたというサンカであった。サンカは、ラオトルの最初の取引き相手だったという。かれについて、こんどは、一八一九のおとめが、ひとりの少年をつれてあらわれた。かの女は、サンカの娘で、イレーネといい、少年のほうは、ラジーメというオロチヨンの息子で、ショーリカとよばれた。イレーネは、ながい外とうのえりもとから、はでな上着をのぞかせ、皮の手ぶくろを手にさげていた。わたくしは、かれらにパンなどをごちそうしたうえで、同行をすすめてみたが、かれらは、ヤーゴと相談してみるからといって、立ちさつてしまつた。ヤーゴは、このとき、どこかへ姿をけしていたのである。

村のすぐそばには、アルベジハ河の本流がながれている。河はばは、一五〇メートルもあるか(図102)。両岸にすこしばかりの河原をのこして、ほとんど河はば一ぱいにながれてゆく。この村のすぐ上流で、アルベジハは、ターリンホ、ターリンホ、ロチヨウコウなどの、いくつものおおきな流れにわかれる。われわれのめざす基

地は、ここからぼんぬにむかっているロチョウコウをさかのぼった、その水源にあった。あとにのべるオロチヨンの移動路のしめすように、いくつもの大支流の交点にあることは、オロチヨンの交通路の交叉点にもあたつていた。岸に立っていると、一そな小舟に、ひとりのオロチヨンがのりこんで、ゆっくりと流れをさかのぼつてくるのがみられた。舟の長さは七一八メートルで、木のわくにシラカンベの皮を張つてつくられていて（図版一六ページ左上）。かれらは、この舟をオムローチンとよび、いつもは河岸にかくしておいて、必要なとき引きだしてつかう。ふつうの大きさなら、四人のれるが、つくるのはかんたんで、ふたりがかりで二一三日あればよい。一度つくれば二三年もち、一家族にひとつくらいずつもつていてるらしい。深い河をわたるときには、トナカイの鞍や装具はすっかりはずしてオムローチンではこび、トナカイはまとめて河のなかに追いやるのである。むらがつて河をおよぎわたるトナカイが、水面に角の林をゆらめかせるながめは、壯觀であった。

午後には、またべつのオロチヨンがあらわれたけれども、やはり確答をあたえずに去つた。隊員たちは、のんきに、馬にのつてあそんでいた。一頭だけ手におえないのがいたのに、騎兵出身の本郷さんは、自信ありげにのつた。たちまち馬はねこのようにおとなしくなり、感心してながめているまえを、本郷さんは、しずしずと河のなかにのりいれた。対岸へわたろうといふのである。ところが、河のなかほどまできたとき、馬はとつぜん立ちどまり、あわてる本郷さんをのせたまま、水のなかに横になってしまった。一同は腹をかかえたが、流れさらうとする鞍のうえの毛布などをすくうのに、あとはおおさわぎとなつた。夕ぐれには、松本さんや川添が、三日月沿で、なん匹かのフナを釣ってきて、ひさしぶりの魚料理にありついた。もつとも、味は感心するほどのものではなかつた。

つぎの朝にも、またまたオロチヨンがやってきたが、結果はおなじであった。いかにここがオロチヨンたちの

中心地とはいながら、ひろい地域にちらばっているはずの少数のかれらが、あまりにもひんぱんにあらわれるのに、わたくしはおどろいてしまった。じつは、そのときはまだ知らなかつたが、対岸の小さな支流を数時間のぼたところに、何家族かが集結していたのであった。しかし、オロチヨンたちの態度には、なんとなく不安を感じずにはいられなかつた。連絡のはやいかれらのことだから、われわれの希望もすでに知つており、ヤーゴから話もきいているにちがいなかつた。だが、ほかの話をするときは、あいそよく應対するのに、かんじんの問題になると、申しあわせたように、ことばをごして、あいまいになつてしまふのだ。姿をみせたヤーゴにたずねてみても、オロチヨンたちは、あまりゆきたがらない、といふばかりであった。なんとかうまく話をつけてほしい、とたのんでも、相談してみますというだけで、熱心さはまったくみられなかつた。ルカシカだけはべつとしても、かれらのあいだに、なにか共通した感情のわだかまりがあることはたしかであった。そのルカシカも、いまはどこかへ消えてしまつてゐる。かれらは、いったいなにを考えているのだろう。チャン・クエイ・タンにさえ、その原因は理解できなかつたのである。

九日の朝になつて、サンカとヤーゴがふたたび顔をみせ、いっしょにゆくわけにはゆかないと、ことわりをのべた。わたくしは、閨さんとラオトルとを通訳に、そのわけをたずねた。ヤーゴが、サンカにかわつて、いろいろに説明した。トナカイが足りない、いまは暇がない、人が足りない……。どれもこれも、わたくしにはなつとできなかつた。もつとほかの原因が、もつと根本的な原因があるにちがいない。わたくしは、さまざまに、つづこんできいてみた。賃銀が足りないのかときけば、そうではないといふ。われわれが氣にいらぬのかといえは、それでもないといふ。なにをとりあげてみても、ヤーゴはことごとく否定し、しかも頑強に同行をことわつた。オロチヨンやとい入れも、もはや失敗かとさえおもわれたが、わたくしはまだあきらめきれなかつた。

とうとうさいごにヤーゴが口をすべらし、まえにじぶんたちをやとった日本人は、約束しておきながら、賃銀をはらわなかつた、といった。これだつた。わたくしは、たちまち了解した。かれの氣もちのそこにあるものは、まさに日本人に対する不信の念であつた。アムールの船上のボーアのことが、ふと頭をかすめた。わたくしが口をつくしても、ヤーゴの不信の念は消えず、どうしてもだめだ、といいはつた。ここまでくれば、事態はもう絶望的だつた。

このとき、チャン・クエイ・タンなら、この事態をすぐえるかもしれない、という直感がひらめいた。チャンさんは、ちょうどでかけていて、居あわせなかつた。閔さんが、あわててとびだしていった。まもなくつれもどされたチャンさんに、わたくしは手みじかに事情をはなし、たすげ舟をもとめた。かれは、ヤーゴに話はじめた。話は、身ぶりをまじえてるとつづき、ときとして溝面をつくり、ときとして笑顔で語つた。ヤーゴは、はじめはなんども抗議したが、しだいにしづかに耳をかたむけはじめた。話はほとんどわからなかつたけれども、やがてチャン・クエイ・タンが語りおわつたとき、ヤーゴの表情はおだやかになつていた。「ゆくことにします」とヤーゴはいった。ただし、トナカイはたくさんは出せないが、ルカシカのぶんを入れて三〇頭ぐらいに、六人オロチヨンをつけるなら出そうといつたが、さらに話しあつたすえ、三四頭まで譲歩した。そのかわり、男は三人だけで、あの三人は女と子どもでいいかときいた。わたくしは承知して、協定は成立した。オロチヨンたちは、明朝出発時間までに、トナカイをつれてここにくることになつた。わたくしは、ようやくほっと息をついた。

トナカイとともに

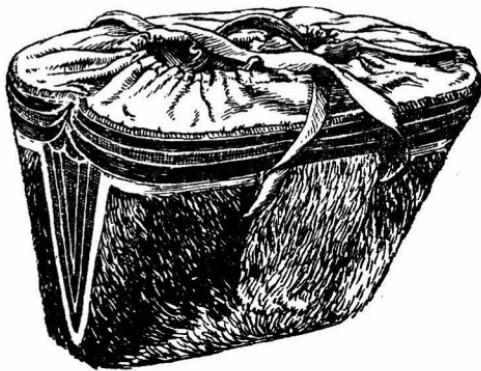


図 63. トナカイの背につむ容器。
ハンダハンの毛皮でつく
り、染めたなめし皮で、か
ざりをつけてある。

チーリンジ出発の朝になった。トナカイがやとえることになつたので、一二三頭の馬のうち、九頭だけをのこして、のこりはモーホへかえすることにした。馬夫も、半数にへらして、しごとぶりのまじめな六人だけをつれてゆくことにした。ラオトル(張学明)、おかま帽、……そのほか。

シナ人の名まえをおぼえるのはめんどうなので、もっぱらあだ名が通用していたのである。オロチョンたちもやってきた。サンカ、ルカシカのほか、あたらしくニコライという男、アトケイという婆さん、それからせむし娘のマリーネと、ショーリカ少年とがくわわった。ヤーゴは参加しなかつた。

積載量のちがう馬とトナカイとに、それぞれ荷物をふりわけるのでてまどつて、出発は一〇時ごろになつた。ながい隊列につながれて、おとなしくひかれてゆく、くびをふるたびに、さまざまに枝わかれた巨大な角が大きく上下にゆれ、鈴が音をたてた。それぞれの群れの先頭に、オロチョンたちが一人ずつたづなをとっている。アトケイ

(図版一六ページ左中、図63)

——その中にわれわれは米をいれた——を背に、くびに結んだひもで五一六頭ずつ一列につながれて、おとなしくひかれてゆく、くびをふるたびに、さまざまに枝わかれた巨大な角が大きく上下



図 64. 大興安嶺の丸太小屋. 上(シナ人のもの. アルジャンの宿場の倉庫), 下(ロシア人のもの. ガン河の中流. 105ページ参照).

婆さんは、銀髪をふり乱し、長い外とうともひき、なめし皮の靴に、長い杖をついて、やや前かがみに、それでもしつかりと歩いてゆく。マリー・ネもおなじ服装で、頭にプラトークをかぶり、背中のこぶにおされながら、トナカイの角のまえを小走りに足をはこんでいる。そのからだつきと陰気な顔、ぎょろりとした眼は、おとぎばなしの魔女をおもわせた。そういえば、杖をついたアトケイ婆さんの姿も、年とった女魔法使そっくりにみえた。彼女たちを護衛するかのように、ニコライが大股にあゆんでゆく。帽子をかぶり、口ひげをはやしたその顔は、ロシア人そのまで、ルカシカやサンカの氣のよさそうな顔つきどちがって、だまりこくったむずかしい表情であった。馬夫たちは陽気で、おかま帽は鼻うたなどをうたっている。チャン・クエイ・タンはあいかわらず、飄然と杖をついて一行のあとにしたがった。

河ぞいの草原をしばらくゆけば、本流とターリンホとの合流点にちかい、アルジャン(二站)の宿場である。フクシャン金坑への交通のためにもうけられたもので、チーリンジの農家とおなじく、丸太組みの壁に泥をぬり、カラマツの皮や

板で屋根をふいた、小さい倉庫が立っていた。高いゆか、とびらのつけかたなど、ちょうど正倉院のひな型のようだ。ただし、壁の丸太がけずられていない点で、日本のあぜくら式建築よりは、はるかに原始的ともいえよう（図64）。

ここが、ターリンホの渡渉点であった。アルベジハの一支部とはいえ、川はば一〇〇メートルもあるこの流れを、トナカイや馬は一と群れずつ分れてわたっていった（図版一五ページ下段）。深さはあんがい浅く、ひざぐらいであつたが、水はさすがにまだ冷たかった。われわれの行進路は、オロチヨン道であった。細いふみあとが、森林をぬけ、谷をわたり、イエルニクのしげみに沿い、ふたたび林にはいってゆく。その通路は、大きな流れをさけて、おもに枝谷のあいだをぬってゆき、ところどころで大河谷にぬけて出る。われわれは、その夜のキャンプを最後として、アルベジハの本流をはなれ、ターリンホからわかれた枝谷の上流をつぎつぎとたどりながら、南下をつづけていった。

オロチヨン道が出あうところにはよく、シラカンベの皮にかきつけたロシア文字の手紙が、木の枝にはさんで地面につき立ててあった。これらの手紙は、通りすがりの者の手によつて、つぎからつぎへと場所をうつされ、ついに目的地まではこぼれるしくみになつてゐるのである。たとえはしてしない樹海のなかに分散していくても、かれらのあいだには、いつでもよく連絡がたもたれ、いま誰がどの地点にいるかということを、すべての者がたがいによく知りあっており、ほかの家族の移動の道すじも、手にとるようにおほえていた。

ここで、かれらの移動路の例を、いくつか紹介しておこう。サンカの話では、一九四〇年以後のかれの足跡は、表7および図65のとおりであった。一ヵ所の滞在期間中でも、そこを根拠地として、かなりとおくまで狩りにゆく。たとえば、大ジモイチ滯在中には、ロチヨウコウを横ぎりコボリの谷まで、およそ三〇キロの遠方にり

表 7. トナカイ・オロチヨン（サンカの家族）の移動路。

季 節	場 所	直線距離	滞在日数	同 行 者
1940—41 冬	大ジモイチ川	15km	3 カ月	ニコライ、ピエトロ
1941 春	カラオク川	10km	2 カ月	ク ク
〃 夏	大チャマリ川	15km	3 カ月	ニコライ、ピエトロ、 フェリップカン
〃 秋	アルバジハ上流	15km	2 カ月	フェリップカン、ラジ ーメ
〃 秋—冬	チンリンジャンシ川	20km	2 カ月	ラジーメ
1941—42冬—春	ジモイチ川	10km	6 カ月	ク
1942 春—夏	オルスクナイ川	30km	1 カ月	ク
〃 夏	チーリンジ			

※ 大チャマリ川の支流である。

スとりにでかけているし、カラオク滯在中には、エリカシ川をさかのぼってアルベジへの源流にいたる、六〇キロの距離まで出猟しているのである。狩りにでる日数は、二一三日からひと月以上におよび、二〇日以上も遠出するときは、ひとりあたり三四頭ずつトナカイをつれてあるくが、短期間ならば、トナカイをつれず、銃とかんたんな食糧とを背にしてあるく。食糧には、メリケン粉やハンダハンのほし肉をもってゆき、野ネギをとつて助けとするという。サンカがチーリンジにあらわれたのも、一時的な出であるきで、家族や家財は、オルスクナイのユルタにのこしてあった。

オロチヨンたちの移動は、表7からわかるように、ふつう二三家族づれでおこない、その組みあわせの顔ぶれは、時により変化する。⁽²⁾もとも、狩りには、かならずしも協同作業を必要としないので、家族ごとにやる。しかし、えものの肉はたがいに分けあうばかりでなく、トナカイをゆうすうしあったり、ときには、毛皮や皮製品の賣りあげ金まで分けあうことがあって、相互扶助はかなりうまくおこなわれ、家族のあいだの生活の差は、ほとんどないといつてもよいらしい。⁽³⁾数家族があつま

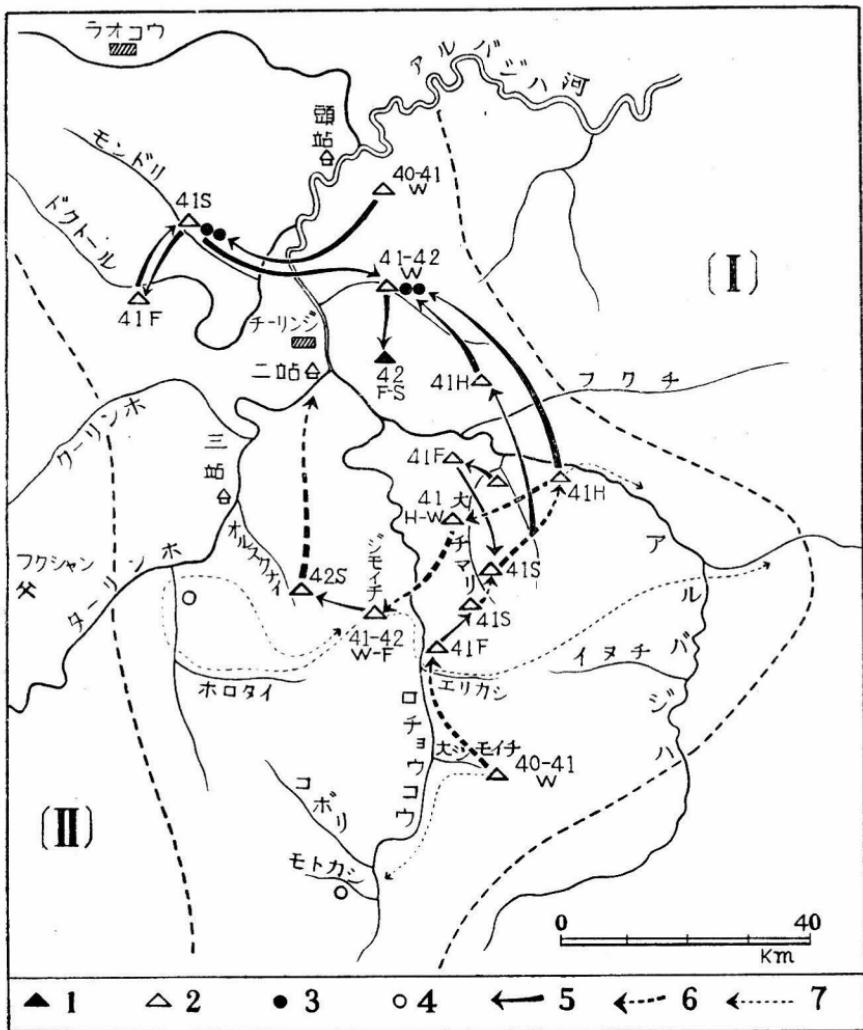


図 65. モーホ・オロチョンの移動路の数例。1 (1942年6月のユルタの位置), 2 (それ以前にユルタのあった地点), 3 (現在使用中の倉庫, 1941~42年冬の分), 4 (現在空の倉庫, 1940~41年冬の分), 5 (ユルタの移動路), 6 (同上, サンカ一家のもの), 7 (サンカのおもな出猟路)。数字は年度を, F, S, H, W は四季をしめす。
 (I) は1923年ごろから狩りにゆかない地域を, (II) はキラムト・オロチョンとの共同出猟地をあらわす。

つたり、わかれたりする原因のひとつが、えものの多少による——多ければわかれ、少なければあつまる——こととも、やはりこのような相互扶助を目的として、集團がつくられていることをしめすものであろう。このような組織によって、かれらは、単独でいるときえものの少ない場合におこる危険を、まぬがれているものと思われる。



図 66. トナカイ・オロチョンのパン焼き。上(シラカンバの皮でつくったパンだね入れと、木製のへら), 下(パンを焚き火でやく)。

準備ができると、これをひらたくのはし、まるく

われわれがテントをはると、かれらも、そばにユルタをつくった。滞在のためのユルタが、シラカンバの皮などで、りっぱにおおわれている(図版一四ページ上段)のとちがって、布でかんたんにおおいをつくっただけのものである。われわれの配給する粉で、かれらは、ひらたくまるいパンをやいた。やくまえには、シラカンバの皮でつくった容器に粉をいれ、長い柄のついたへらでこね、これに、べつの容器にとつてあつたパンだねをませあわせる(図66上)。パンだねは野生酵母で、毎日こねた粉の一部をつぎつぎとたねにのこしてゆくのである。

して、おなじくらいの大きさの鉄板のうえにのせ、火のそばにおく。てきとうの固さになると、火の横に立てたみじかい棒にもたせかけて、焼きあげる(図66下)。このしごとはおもに女たちがやつた。このパンは、フレイバーというが、副食には、シカのほし肉などを用意していた。へいせいの生活では、肉のかたまりをいれた米のかゆやふかしたメリケン粉の油揚げ(アラチという)、ピスケットなどを食べることもあるという。野菜としては、おもに野ネギをとり、コケモモの実のジャムもつくる。飲料は、紅茶のほか、トナカイの乳をのみ、たばこや、ウォツカ、白酒などの酒類もこのんでたしなむ。食事回数は、一日三回である。

夜になると、男たちは、ときどき狩りにでていったけれども、いつも手ぶらでかえってきた。かれらは、ふつう、シカなどの水のみ場をみつけ、氣ながに一と晩ぢゅう待ちぶせするのであるが、行進の途中では、それだけのゆとりもなかつたためであろう。これだけのオロチヨンをつれながら、けものがとれないということは、われわれの食事のこんだてにとつて、ひじょうな違算であつた。チーリングで買いいれた卵や野菜は、すぐに盡き、松本さんたちがたまに釣りあげる魚をのぞけば、毎日の食事は、ふたたびせんぎり大根と干魚とともにどつてしまつた。そのかわり、せんぎり大根に悶するかぎり、およそありとあらゆる料理がくふうされた。煮つけやみそ汁はもちろんのこと、ついにはせんぎり大根の天ぷらまであらわれ、つきるところを知らなかつた。おそらく乾燥野菜のなかで、これほど効用にとんだ、しかもあきのこないものは、ちょっとほかには見あたらぬであろう。川添や加藤の苦心は、若かりしころの料理人チャンさんのコーチよろしきをえて、いまやかれらは、当代随一のせんぎり大根の名料理人となりおおせた。

〔註〕

① このような滞在地には、エルタのほかに、いろいろな設備がもうけられる(ピストラヤ紀行三六一ページおよび図83)。

氣温は日差しに高くなり、林は若葉でつづまれた。谷にでるたびに、依然としてヌカガが襲来し、それにブユもくわわった。溪流状の小谷で、流れの石をあげてみると、ブユの幼虫やさなぎが、まっ黒にくつついていた。これがみんな孵化して出たら、そうとうひどい目にあうことになるだろう。それに、夜テントをはると、小さなダニがはいだてきてくいついた。気がつかないでいると、いつのまにか血をすってふくれあがり、頭をのこさないようピンセットでとるのが、ひと苦労であった。馬には、鞍がうまくあわないのか、鞍ずれをつくるものが、なん頭もできた。しかし、行進は順調にすんだ。馬の三分の一ちからをトナカイにかえたことは、やはり成功だった。ターリンホ以後は、ハナゴケもおおく、小谷のほとりでは、馬のくう野地坊主と、ハナゴケのおおい穂原とが、どちらも近くにあるようなキャンプ地が、たやすくえられたので、馬とトナカイとの習性のちがい

- (2) オロチヨンたちは、氏族組織を維持しているが、ザバイカルのツングースとちがつて（シロコゴロフ（一九四二）前出、五七八ページ）、狩獵地域の分割には氏族は関與せず、また狩獵組の構成も氏族とは無関係である。
- (3) シロコゴロフ（前出、五七二ページ）は、トナカイの流行病の大発生にあたつては、氏族は、その氏族員に属するすべてのトナカイを、各家族に分配することがあるとのべ、これは氏族財産の觀念とはたぶん無関係で、不幸のさいの相互扶助の原則を意味するにすぎない、と考えている。われわれのオロチヨンの場合も、相互扶助は、あとにててくるよなトナカイ飼養の危機や、えものの減少にともなう生活の不安定などを通じて、氏族とは無関係に發達したものであろう。
- (4) ふつうの女のしごとは、食事の用意、家畜のせわ、子どものせわ、獸皮の手入れ、ぬいもの、皮製品づくり（意匠の考案、裝飾までふくめて）、野營地の選択（男が狩りなどで不在中にも、しばしば野營地をうつす）、コケモモの実の採集など、單に家事の雑用のみならず、生産活動にも、おおきな役わりを演ずる。

待 ち ば う け

になやまされることもなかつた。トナカイは、土地の状態のいかんにかかわらず、歩度をかえることなくすらすらとすすみ、馬も数がへつたので、故障をおこす率がうんとへつた。ただ、急斜面の上り下りには、背に固定されていないトナカイの鞍は、前後にずれて、オロチヨンたちに厄介をかけた。

六月一四日、われわれは、ターリンホの枝谷から峠をこえて、ふたたび、ロチヨウカウガガの支流であるコボリの谷に下つた。峠のうえには、はじめてハイマツがカラマツのあいだに姿を見せた。日本アルプスの森林帶に下つてゐるハイマツとおなじく、やはり地表から枝わかれしたまま直立していた。ただ、そのそばにシラカンバがならんで立つてゐるのが、日本の山では見られない風景であった。

われわれは、かねて本隊から、ちかく連絡のため飛行機がくるという、無電による予告をうけていた。一四日の朝の交信は、つぎのような本隊長の指示をつたえてきた。

一、飛行機ハ一五、一六、一七ノ三日間ニ飛來スル。

二、一五日ヨリ行動ヲ停止シ、対空手段ヲ講ゼラレタイ。

三、対空連絡手段ハ、高地上ニ於テノロシ火ヲアゲラレタク、発煙筒モ併用セヨ。

ちょうど一四日の夕方についたコボリ谷のキャンプ地は、川に沿うて、たて四キロ、よこ二キロにわたつて、ひろびろとひらけた空き地で、航空写真でみても、空からわれわれをみつけるのに、理想的な場所であった。われわれは、草地のまんなかに、枯れ枝を山とつみ、いさといいう場合に火をつけて煙をあげる用意をととのえた。なお、すぐうしろの山の高みに発煙筒を準備し、交代に見張りを立てることにした。一五日のひるすぎ、爆音がきこえてきた。空は一めんに雲でとざされ、機影はみえなかつたけれども、それといふことで煙をあげた。しかし、爆音はすこしのあいだひびいたのち、やがてかすかになり消えていった。だめだった。しかし、あと一日あ

るから、あるいはうまくわれわれをみつけてくれるかもしれない。べつに飛行機がきてくれなくても、漠河隊としてはこまらなかつたけれども、森林地帯での空地連絡は、すくなくとも探検技術のうえからいって、重要な問題のひとつであった。それに、たぶん飛行機から投下されるであろう慰問品には、單調な食生活のなかで、おおきな魅力があつた。

しかし一方、ここで三日間の滞在を余儀なくされることは、そうとうこまつた問題でもあつた。われわれは、チーリンジの滞在をふくめて、すでに予定よりよほど余分の日数をついやしていた。うかうかするうちに、支隊が基地についてしまうかもしれない、というのが、われわれのなやみの種であった。ここでぐずぐずしていると、一時的にせよ、支隊に失望と落胆とをあたえることになるかも知れない。ちょうど江原と加藤とのつよい希望もあつたので、わたくしは、馬三頭・馬夫二人にニコライをつけて、ひとりを先発させることにした。基地についたあと、江原はニコライをつれて、支隊のくる方向に偵察をこころみ、加藤は、基地に小屋をたてることとなつた。本隊が着くまでには、まだかなりの日数がいるだろうと思われたから、それまでのあいだ、小屋の利用價値は、そうとうあるものと思われたからである。江原が、夢見を氣にしていたことは、支隊の紀行にもでてくるとおりであった。

あくる日、ふたりは出發し、のこりの者は、また發煙準備をととのえた。きのうよりもすこし早い時刻に、またもや雲のなかから爆音がひびいてきた。こんどのは、音がちいさく、煙はあげたが、爆音は近よろうともせず、そのまま空のかなたに消えてしまつた。一七日は、終日待つたけれど、爆音さえもきこえなかつた。そして、夜の無電は、

一、本日一二二時三〇分、漠河隊及ビ支隊ノ位置不明ニツキ、飛行機ハ引キカエシテキタ。モウ來ナイ。

二、漢河隊及ビ支隊アテノ物糧ハ、本隊デ管理シテアル。

と解説された。なんのことはない、完全な待ちぼうけだった。そのうえ、たのしみにした慰問品は、ああずけをくってしまった。さあ、ぐずぐずしてはいられない。

三日間の休養で、人間はみな元氣はつらつとしていた。濕地でいたんだ靴や衣類のつくりもできた。ただわたくしだけは、かがとに靴ぞれと豆とかさなって、うみをもち、おもしろくないことになっていた。歩きだしでみると、表面の傷だけがなおって、化膿はおくふかくまで進行していたのだ。しばらくゆくと、とうとうつま先きでしかあるくなつた。この日の目的地は、モトカシの谷にある、グラントヘルト小屋という小屋で、わずか一〇キロほどの行程だったが、そのわずかの道で、疲労困ぱいしてしまつた。思えば、まえの腰といい、こんどの足といい、こんどの旅行は、なんの因果でこんなに故障がおきるのかと、なきなかつた。

グラントヘルト小屋は、この山中の仮りすまいとしては、あんがいりっぱにできていた。丸太づくりの型式は、アルジョンあたりの家と大差はなかつたが、なかには机などをそなえ、独露辞典などものこされていた。屋根うらへあがるのに、そとから破風につくつた入り口に向つて、丸太にきざみをつけただけのはしごが立てかけられてあるのが、興味をひいた。屋根うらには、大まさかりや、りっぱなフライパンなどの器具が、たくさんおかれaitが、オロチヨンたちがなにひとつ手をつけていないらしいのが、山のおきてというようなものを感じさせた。

、グラントヘルトという人物については、長春いら、さまざまな傳説的なものがたりをきいていた。ドイツ人といふものもあれば、ロシア人というものもあり、オロチヨンたちは、この小屋を、「英國人房子」とよんでいる。しかし、ほんとうは、フィンランド人であつたらしい。かれは、一九三五年いら、モーホ・オロチヨンの

領域内を、いたるところ歩きまわり、数ヶ所に小屋をたてた。かれの目的はスペイだという者もあるけれども、じっさいは單なる採金業者にすぎず、金坑の試掘がその目的であったと思われる。しかし、あしかけ四年にわたる山中放浪のすえ、かれの姿は、忽然として大興安嶺から消えてしまった。一説によれば、憲兵隊にとらえられたともいふけれども、その眞偽はあきらかでない。あとは、ただ空の小屋のみが、あるじのむなしい努力を象徴するかのように、風雨にさらされ、朽ちるがままに残されている。

この日は、はやく行進をやめたとはいながら、基地までは、あとわずか一日の行程となつた。

基地——支隊きたる

あくる日は、足の痛みはすっかり引いて、わたくしは元氣をとりもどした。前夜、おもいきってメスで切開したのがよかつたのだ。小屋の附近をみまわると、すぐ下手のカラマツの疎林のなかに、やはり礫原があらわれていた。このあたりは、山すそのゆるい傾斜地で、礫原よりひくい土地には、カラマツのあいだに、すっとミズゴケの湿原がひろがり、マメカンバなどがしげって、流れにまでつづいている。礫原は、ラオコウちかくでは、尾根によくあらわれていたが、チーリンジよりこちらでは、一般に、むしろ山腹から谷の湿地までのあいだの、ゆるやかな山すその斜面に出現する場合がおおかつた。

道は、モトカシをなばり下り、さらに南に峠をこえて、ボルカシの谷にでる。オロチヨン道ではあるが、ところどころに、なた目ではない、のこぎり目がのこっているのは、昨年測量隊のとおったあとにちがいない。いままでも、このあとは、ずっとづいていた。食糧がへり、荷物がすくなくなったので、アトケイ婆さんやマリ

一ネは、トナカイにのつた。婆さんは、トナカイにまたがりながらも杖をすてず、やはり地面をついてゆく。ちょうど、舟に棹さしているぐあいである。うすみどりの地衣が、一めんにぶらさがつた枝の下を、トナカイをあやつって進むアトケイ婆さんの姿は、やっぱり、どうみても魔法使いだった(図版一五ベージ上)。

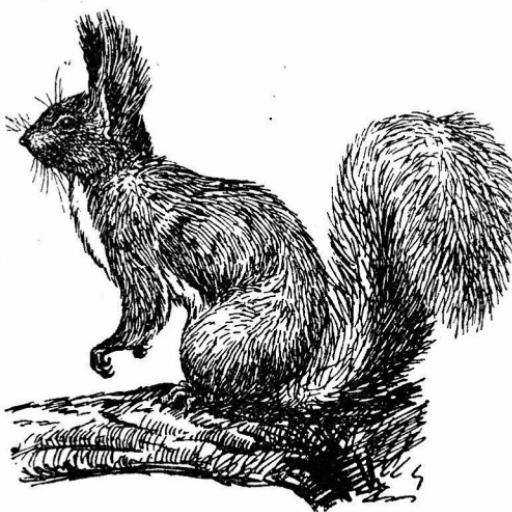


図 67. ホクマソリス *Sciurus vulgaris mantchuricus* Thomas.

ボルカシで一夜をあかせば、いよいよ基地入りの日である。もうひとつのかたをこえて、とうとうロチョウコウの源流にはいった。峠の山腹には、五メートルばかりの段がついていて、そこをくだるたびに、トナカイたちは、せなかの荷物をすらせた。中央部の山地に特有な、この階段状地形は、これまでの道にそうても、しばしばあらわれた。ロチョウコウの谷は、このあたりでも、まだゆっくりとしたはばをもっていたが、流れはもはや一メートルはばにすぎず、チーリンジの近くをながれていた大河のおもかげは、みるよしもない。季節はすでに初夏となり、日が高くなると、暑さをおぼえるほどになっていた。

もうすこしで基地というところで、高いカラマツの下枝に、一びきのホクマソリスがみつかった。シマリスなら、いままでにいくらもみたけれど、ほんもののリスが姿を見せたのは、これがはじめてであった。猟銃は、ゆだんして、トナカイにつけたままだったので、わたくしは拳銃をぬいて、一〇メートルほどの高さにいるその姿

をねらった。一発はなすと、枯れていたその枝は、リスの足もとからボキリとおれて、地におちたが、リスの姿は、はやくもとなりの木にうつっていた。それからは、みんなが騎銃や拳銃をもちだして、射撃大会のような大さわぎがはじまつた。うたれるたびに、リスは、ひらりひらりと枝から枝へととびうつり、かすり傷をおった気配もなかつた。サンカさえ、騎兵銃でねらって失敗したが、とうとう本郷さんがしとめて、さわぎは落着した。まもなく、とつぜん林がきれ、木の切りかぶばかりがのこつた空き地にでた。そのまんなかに、骨組みばかりの、つくりかけの小屋がみえた。ここが基地だつた。昨年、基線測量にはいった測量隊の、キャンプ地のあとであった。先発は、三日まえに着いていたが、江原は支隊をむかえにいっただるまで、加藤だけがのこつていた。さいわいにして、支隊は、まだ着いていなかつた。だから、テントをはるやいなや、われわれのまつ先にしたことは、小屋のよこに一本だけのこされた高いカラマツのてっぺんに、旗をあげることであつた。支隊のための目じるしである。加藤がこのしごとをひきうけ、一同がはらはらしながら見まもつているうちに、とうとう二〇メートル以上もあるこずえまでよじのぼり、日の丸の旗をむすびつけた。旗はへんぱんとひるがえり、われわれの目的地到着を、山々に告げしらせた。

この旗は、しかし、まさにからうじて間にあつた。わたくしがテントのまえで、リスの解剖をはじめてまもないころ、おもいがけない銃声が、われわれをおどろかせた。支隊が着いたのであつた。基地を設営して、北上してくる隊をむかえるという任務をおびた漠河隊の面目は、わずか二時間のちがいで、からうじてたもたれたわけだ。

われわれの肩の荷は、にわかにゆるんだ。支隊の成功は、いわば、全探検隊の成功を意味する。われわれは、支隊の成功を確信してはいたけれども、じっさいに眼でみると、やはり氣がかりであつた。しかし、いまや

その心配は去った。あとは、本隊の着くのを待つばかりだ。その本隊は、予定よりもよほどおくれて、まだビストラヤの中流にいた。基地に着くまでには、まだかなりの日数がかかるだろうが、その一〇〇キロあまりの道のりをとびこえて、夜の交信の電波がおくりだされていった。

一、漠河隊ハ本二〇日一七時基地ニ着ク。

二、支隊ハ基地ヨリ二キロノ地点ニアリ、土倉基地ニ來リ連絡成ル。万歳。

この電文のあとに、わたくしは、

三、現在隊ハ、馬九頭、トナカイ三四頭、米二石、バイメン一一〇キロ。

とつけくわえた。じつは今までわたくしは、トナカイのことを、わざと本隊にかくしていた。であったときにおどろかせてやろうという、子どもっぽいいたずら氣からであった。「ヤクトガ発見デキヌタメ、案内ナシデ行進シテイル」という電文をうけとったのは、三日ばかり前のことだったが、それをよみながら、内心とくいの念をおさえることができなかつた。このしらせをみて、今西隊長や、本隊の民族調査担当の伴が、いつたいどんな顔をするだらうか、と想像して、わたくしは電文をかきながら、ひとりでクスクスわらつた。

あくる朝、川喜田はじめ支隊の一団は、雨のなかを、そろつて基地にはいってきた。その服はやぶれ、靴はあわれにいたんではいたが、顔はみな元氣だった。基地は、きゅうににぎやかになつた。支隊でむかえにでて、ゆきちがいになった江原も、ニコライとともにかえってきた。かれらは、クマラ河の源流ちかくまでゆき、ひきかえしてホロゴイヤの谷まできたとき、支隊のとおりすぎたあとをみつけて、一日おくれてあとを追つてきたのであつた。

基地の建設は、木の伐採からはじまつた。ここについてすぐ、わたくしはラオトルをよんで、加藤のたてかけ

た小屋についての意見をきいた。かれが、かつて大工をしていたことを、思いだしたからである。小屋は、四メートルに六メートルくらいの長方形で、柱を掘立て、むな木をおくところまでできていた。ラオトルは、柱をゆびさして、こんなものはいらない、といった。柱のかわりに、丸太をよこにして組んでゆけば、壁もそれでできあがるからかんたんだ、というのである。つまり、この地方の丸太小屋のつくりかただ。加藤にしても、この型の小屋はいくらでも見てきていたのだが、じぶんが建てるという場合には、やはりなじみのある日本式を採用したのであろう。傳統としてもちづけてきた文化型式というものは、環境のちがった他國にきても、なかなかすてがたいものであるらしい。わたくしは、小屋のなかのゆか張りだけを指定して、あとは、この骨組みをもとにして、自由にラオトルにやらせることにした。やがて、ラオトルの指揮のもとに、馬夫たちは、ぞくぞくとほそいカラマツを切りだし、柱にそうてそれを組みあげていった。

一方、本隊からは、ふたつの隊の労をねぎらう返電とともに、食糧補給隊を、ニジネ・ウルギーチの合流点までよこすように指令してきた。予定のおくれた本隊の食糧は、そこまでしかもたないらしかった。本隊は二七日にそこにつく予定だから、二三日に出発させるようという指令だったが、準備のつごうで一日おくれ、梅棹・川添・土倉の三人は、ニコライ、マリーネ、ショーリカと、トナカイ一五頭、馬四頭とをつれて出発した。キラムトへかかるフォーミン・イワンも同行した。おなじ日に、藤田と江原とのクマラ河源流偵察隊も、ルカシカをつれてでてゆき、いったんにぎやかになった基地は、またにわかにさびしくなってしまった。

そのあいだに、小屋は着々とできていった。カラマツの樹皮で屋根をふき、壁の丸太のすきまにはコケをつめて、四日間でみごとにできあがった。細い木をならべてつくったゆかには、炉を切らせ、うえから針金でやかんをつるした。片方の壁には、書棚をつくり、したに箱をおいて机とした。加藤は、エナメルで火の用心とかいた



図 68. 基地の小屋

札を、はりにぶらさげ、松本さんは達筆をふるって、「大興安嶺調査隊基地」とおもてに表札をかけた。それは、ひろびろとした快適な丸太小屋だった。われわれはテントからひっこし、資料の整理やオロチヨンからの聞きとりのあいまには、茶をたててたのしみながら、毎日をすごした。夜はまだ寒かつたが、ひるの気温は二五度にものぼり、ハエがふえ、カやアブもはじめた。春は一瞬のうちにすぎたり、大興安嶺の樹海は、夏にうつろうとしていた。いつのまにか、林のなかから発生してきたエゾシロチヨウの大群は、小屋のまわりのぬかるみにあつまつて水を吸い、人がとおりすぎるとワツとまいあがって、吹雪のようにみだれとんだ。

〔註〕

① クロバエ、ヒメイエバエなど。

トナカイについて

キャンプの夜や滞在地では、トナカイはふつう放しがいにされて、自由にえさをあさっている。とらえる必要ができたとき、場合によると、にげまわってつかまらないのがあらわれる。こんなとき、オロチヨンたちは、塩

のはいった皮の小袋と鉛とを手にもって、カラカラならしながら近よってゆく。いつも塩にうえているトナカイは、その音をききつけると、首をのばして、そちらからも近よってくる。すると、手のひらにわざかばかりの塩をのせ、それをペロリとなめるとたんに、首ねっこをつかまえるのである。しかし、夏がきて、吸血昆虫がふえてくると、トナカイたちは、ひるはあまり遠出しなくなつた。オロチョンたちは、ちいさな焚き火をもやし、そのうえに数本の木をくみあわせて、ちいさなユルタ型のかこいをつくる(図83)。すると、トナカイたちは、アブからのがれるために、その煙のまわりにあつまってきた。かこいは、火のなかにトナカイが頭をつっこまないためである。この季節には、荷をつんだトナカイの列をひいてゆくオロチョンたちは、めいめい手にたいまつをもち、小休止のときにも、きっと焚き火の煙をたてて、トナカイのために蚊いぶしをしてやるのである。

一びきのトナカイの袋角の表面が、皮膚病のように、すこしだれでいるのをみたサンカは、ナイフをとりだして、血のでるものかまわず、手あらくけずりとつた。傳染性があるらしい。アトケイ婆さんやマリー・ネは、毎日トナカイの乳をしぼった(図版一六ページ)。乳は牛乳よりもこく、一日めず一頭につき、茶わん一ぱいくらいはである。乳のできる期間は、五一九月くらいであるが、六月中旬ごろまでは、仔をそだてさせるためにしぼらない。乳は、紅茶にいれて飲む。

このように、かれらにとつては、トナカイは家族同様のあつかいをうける。トナカイがなくては、ユルタの移動もできなければ、えものの運搬もできない⁽¹⁾。これらの生活とのむすびつきにおいて、トナカイは、かれらの貴重な財産となつてゐる。結婚のときの、男から女の家へのおくりものもトナカイである。その場合の数は、ふつう一六頭で、偶数がこのまれる。かつてシャーマンのいたころには、祈禱によんだときの謝礼としても、金や物のほかに、ときとしてトナカイがおくられた。へいぜいでも、トナカイは、それぞれ頭かざりやくびかざりによ

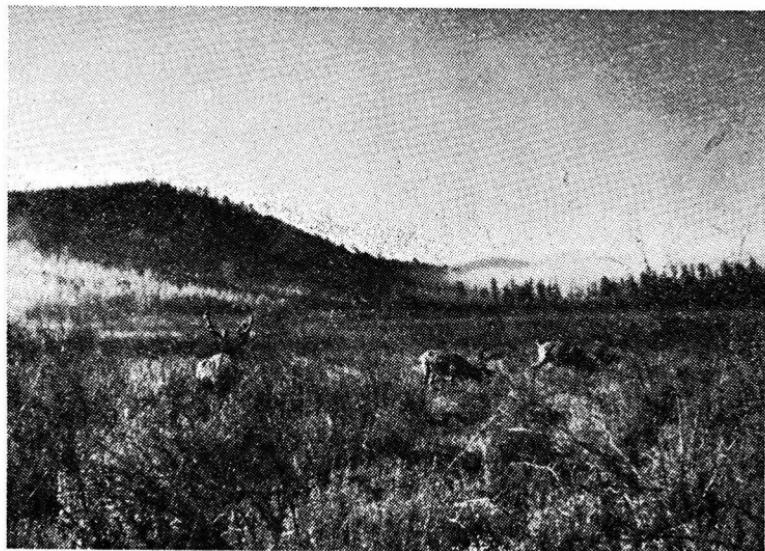


図 69. イエルニクに放されたトナカイ。

つてかざり立てられ、たいせつにとりあつかわれているのである。その数をふやすことは、オロチヨンたちにとって、単に輸送力の増大というとどまらない、重大な意味をもつものであった。

トナカイは、二歳から一四歳までのあいだに、毎年一頭ずつ仔をうむ。ふつう一頭のめすは、八一一〇回出産しておわる。発情期は年一回、九月中旬から一〇月下旬までのあいだの約一週間であって、妊娠期間は八ヶ月、出産は、五月上旬から六月上旬のあいだである。おすのほうは、三一五歳のあいだ生殖能力があるが、六歳から九歳ごろがもつともよいといふ。しかし、発情期のおすは、めすのうばい合いをして傷をおったり、背の荷物をこわしたりして手におえないので、種おすのほかはすべて去勢する。去勢は、二歳のときの雪どけ季節におこなわれ、おすをおさえつけておいて、男が歯で睾丸をかみ切るのである。こうすると、多少体格は小さくなるが、おとなしく使いやすくなる。種おす一頭で、三歳のときなら六一七頭のめすに、四一五歳のときには一五六頭に、六一七歳のときには一二五六頭に種つけができる。ただし九歳以上になると、逆に種つけ頭数はへつてゆ

トナカイについて

表 8. モーホ・オロチヨンの
トナカイ所有数.

家 族	トナカイ数	
	2歳以上	当歳仔
ニコライ	7	6
サンカカ	15	7
ラジカル	10	2
フェリップ	10	6
アボヤニ	15	9
エスベ	8	4
エレ	13	7
	7	2
計	12	5
	101	2
		50

しかし、オロチヨンたちがふかい注意をもって、その増殖をはかっているにもかかわらず、トナカイの数は、むしろ反対にへってゆく傾向さえ見られる。たとえばニコライは、昨年はじめ一八頭をもっていたが、あらたに八頭うまれる一方、一三頭が死んだ。死亡の原因は、病死が四頭、のこり九頭はオオカミにくわれたのである。オロチヨンたちの話では、近年オオカミの繁殖がいちじるしく、モーホ・オロチヨンだけでも、年二〇頭にのぼる犠牲がでて、病死と相まって、とおからずトナカイが絶滅する可能性さえあるという。オオカミ退治には、冬にストリキニーネをしかけておけばよいが、手に入らず、オオカミ狩りに出ても、かしこくてなかなか近よれない。それにもかかわらず、ユルタのそばにいるトナカイまでおそうのである。今年はまだ被害がすくないが、夏になればひどくなるだろうというのが、かれらの心配の種であった。現在、モーホ・オロチヨンの総数一〇家族の所有トナカイ数は、表8のとおりであって、当歳仔の数はわりあい多いのにかかわらず、二歳以上になると、

多い家族でも一五頭、平均すれば一家族あたり一〇頭あまりにすぎない。これでは、かれらの慣習である、結婚のさいの結納にあたる一六頭の贈與さえ、維持することができないであろう。⁽³⁾

トナカイがへって、荷物はこびに足りなくなると、たくさんもつてゐる者から買う。一頭のねだんは四五一一〇〇円で、おなじ大き

さなら、めすよりおすのほうが高い。いまのところは、モーホ・オロチョンどうしどおぎないあつてゐるが、昨年は、キラムト・オロチョンから五頭買つたものもあつた。

この地方では、このようなトナカイの数の減少にともなう生活の脅威は、かならずしもいまにはじまつたことではない。いまのトナカイ・オロチョンの移住以前には、現在のクマルチエン・ツングースがこの地域にすんでいたが、かれらはトナカイをして、地域を移動して、馬オロチョンとなつた。その原因は、やはり長年月にわたるあいだのトナカイの減少にあつた、と考えられている。⁽⁴⁾ いまのトナカイ・オロチョンも、かつて時としては、そのトナカイのほとんどすべてを失なつたことがあつたが、アムール州及びヤクーツク州にすむツングースから買ひ入れて、その危機をきりぬけてきた。⁽⁵⁾

過去におけるこのよだなトナカイ減少の原因として、シロコゴロフは、この地域がもともとトナカイの飼養に適しないものと考え、「満洲高原はこの動物に欠くべからざる良好な牧草と、夏季における涼しい氣温とを供しないのである」とのべている⁽⁶⁾。事実、夏の高溫は病氣の流行をうながすとおもわれ、食糧の問題にしても、夏期をのぞけば、一ヵ所にながく滞在することは、地衣類の欠乏によつて制限されてゐるのである。もともと、トナカイの住むに適した環境は、はるか北方のツンドラ地帯であり、これがツングースの生活に結びついたのも、やはりその地帯であつたと考えられる。そういうところでは、山野に野生のトナカイが走り、家畜としても、コリヤーク人などでは数千頭が飼養されて、乗用や運搬用ばかりでなく、肉用や毛皮用にも多量に消費されている。これらの地域では、狩猟によつてくらしているツングース(たとえばラムート人)でさえ、五〇〇—一〇〇〇頭のトナカイを飼つてゐるのである。より南方のタイガ地帯にもちこまれたトナカイをささえてゐるのは、地衣原や灌木ツンドラのような、ツンドラ的な植物界の断片の存在であるが、タイガのなかにおける、こうしたツンドラの

断片の分布は、南下するにしたがって粗となり、トナカイの飼養環境は悪化する。大興安嶺は、ちょうどその飼育可能な限界にあたっていた。ちょうど、馬飼養の世界からいえば、馬オロチヨンの生活する森林ステップが、ひとつの辺境であるように、トナカイ飼養の世界からいっても、大興安嶺はまさに辺境であり、ここでトナカイも、それを飼うオロチヨンも、周辺的な存在というべきであった。それは、背後のシベリアにおけるトナカイとトナカイ・オロチヨンによって支持されつつ、ようやく今日まで、その生活を持續してきたにすぎないといえよう。かれらが、極北地帯にみられるように、トナカイを肉用や毛皮用としてけっして屠殺しないのは、あきらかに、多数のトナカイをやしなうことができないからである。荷物をつんだり、人をのせたりするためにも、大興安嶺のトナカイの体格はちいさくて、おとつた性能しかもっていない。たとえば、トナカイにのるのは、婦人や子どもにかぎられている。これもまた、周辺地域の不利な生活環境のしからしめるものであろう。現在のように、國境が閉鎖されたのち、さらにトナカイの減少がつづけば、トナカイ・オロチヨンたちは、ついにそのトナカイ飼養を放棄しなくてはならなくなるだろう。⁽⁷⁾

もっとも、現在のトナカイの減少が、氣候や食物だけの問題でなく、オオカミによる被害がおおきく作用していることは、注意しなければならぬ。しばしばいわれる野獸の減少は、かならずしもオロチヨンたちの濫獲によるものばかりでなく、かつてこの附近にわざかすんでいたノロの絶滅の原因としていわれるよう、オオカミの被害による点もあるのではないか。野獸の減少にもとづく食物難が、オオカミたちにトナカイをねらわせるようになつたのかもしれない。近年になつて、トナカイの被害がきゅうにふえたというオロチヨンの話は、ある程度これをうらがきしているように思われる。してみると、こんどは、野獸の減少が逆にオオカミのふえることを制限し、やがてはふたたびオオカミの数のへる時期がくる、とも考へてよいのではないか。このような周期的

現象のひとつ山に、いまがあたっているとすれば、この時期をもちこたえさえすれば、さらにつきの山まで、もとの生活をつづけてゆけるみこみはあるかもしない。それにしても、オオカミの数の変動が、このようすぐ、致命的にまで生活にひびいてくるところが、やはりこの地域の、トナカイ飼養に対する辺境的性格——不安定さをものがたるものといえよう。

もしもオロチヨンたちが、トナカイを飼うことやめなければならない時期がきたとき、かれらは、どのように生活形をかえるであろうか。そのひとつの道は、クマルチエンのように、馬飼養に轉向することであろうが、この地域が馬にとってまったく不適当である以上、そのためには、いまの馬オロチヨンの領域に移住しなければなるまい。しかし、その領域は、もはやかれらを容れるだけの余地があるかどうか、はなはだうたがわしいのである。

もうひとつのは、ここにふみとどまつて、定住化の方向をたどることである。もっとも定住化といつても、かれらが狩りによって生活を維持してゆくために、このひろい地域を全面的に利用しなければならない以上、それは一ヵ所の固定家屋にだけ住むのではなく、要所々々に狩り小屋をもうけるといった形になるのではないか。現にかれらは、あちこちに、かんたんな木組みの固定倉庫⁽⁹⁾をつくり、運搬の労をはぶいでいるが(図65および70)、これを一步すすめて狩り小屋の建設にまで發展することは、それほど不自然とも思われない。冬のあいだ、きまつた土地に滞在するツングースにおいては、方形の木造家屋をたてることは、めずらしくないことだ、ともいわれているのである。モーホ・オロチヨンが、一ヵ所に二ヵ月もユルタを張りはなしにして、狩りの根拠地としていることも、ある意味では、もはや狩り小屋を建設しているのかわりないともいえよう。・・・

このような狩り小屋の建設による狩猟生活は、東部小興安嶺におけるシナ人獵師(打皮子といふ)によつて、

組織的におこなわれており、いくつかの小屋の附近にしかけた、たくさんのかなを、つぎつぎと見てあることによつて、かれらはじゅうぶんなえものを手にいれているのである。⁽¹⁰⁾ただし、このように定住化すれば、その狩りのおもな対象は、リスなどの交易用のけものにかぎられるをえなくなり、オロチヨン的生活といつよりも、むしろ完全な職業的獵師生活となるであろう。現在でさえ、オロチヨンの経済生活は、つぎの節に述べるよう



図 70. トナカイ・オロチヨンの倉庫。高さおよそ4メートル。ビストラヤ上流コンホ合流点ちかくでみたもの。

に、かなりの程度にまで、職業的な毛皮生産者としての生活にうつてしまつてゐるのであるから、定住化による生活の変化は、それほどいちじるしいものとは考えられないのである。

〔註〕

- ① 根據地からトナカイなしで狩りいでかけた場合は、えもののシカ類はその場で解体し、オオカミやクマに食われないよう、木のうえにおいてたり、丸太で組みあげた肉入れ(長さ三メートル、はば六〇センチ、高さ五〇センチくらい)に入れ、丸太をならべたふたをしておいたりする。かえつてから、その位置をしめすと、女子どもがトナカイをつれて取りにゆく。これは、皮ばかりでな

く、肉も食用にいるからである。大きなハンダハンなら、ふつう七一八頭のトナカイを要する。

- ② モーホ・オロチヨンでは、約一〇年まえに、最後のシャーマンが死んで、シャーマンに祈禱を依頼する風習はなくなつたが、三河オロチヨンにはなお一人、キラムト・オロチヨンには二人のシャーマンがのこつてゐる。シャーマンに祈禱を依頼するのは、病氣のときや、一二二ヵ月もえものないときなどである。シャーマンは、ハンダハン皮の長い服を着、下には鉄製のけものの像をぶらさげて、太鼓をうつ。ひとびとは、そのまわりでかしこまり、シャーマンが神がかりの状態になつ

- たとき、たばこを出してすわせる。シャーマンは、ハンダハンの肋骨を二本もつて投げあげ、落ちて上むけば吉、下むけば凶と判断する。そこで、病氣がなおるかどうか、どこで狩りをするのがよいかわるいかをたずねると、シャーマンは骨をみながら、その判断によつてこたえるのである。
- (3) もつとも、トナカイ何頭として計算しても、じつさいに結納としてしはらわれる家畜は数頭にすぎず、のこりは衣服や現金でしはらう。さらに結納としておさめた家畜も、その場で婚賚として返還されることがおおく、したがつて、高い結納はむしろひとつ的形式とみるべきである（シロコゴロフ（一九四一）前出、四四五ページ）。
- (4) シロコゴロフ（一九四一）前出、一二八—一二九ページ。
- (5) シロコゴロフ（一九四一）前出、一二七ページ。「例えば、二五年ほど前に、彼等はそのトナカイを全部失つてしまい、馬を好むようになつたが、しかし一九一五年には、旅行や狩獵にこと欠かないだけのトナカイの数を所有し、時とすると、家族あたり數十頭に達した。」
- (6) シロコゴロフ（一九四一）前出、一二八ページ。
- (7) 國境閉鎖は、オロチヨンの社會組織にも影響をおよぼす。かれらは、現在までのところ、どうにか族外婚を維持しているが、今後はそれも困難になるだらうと、みずからみとめているのである。
- (8) 食糧、衣服、器具類などをいれておく。なお図64上の倉庫も、もともとはツングースのもちいでいる型式であると思われる。
- (9) シロコゴロフ（一九四一）前出、五八九ページ。
- (10) 打皮子たちは、一人の把頭のもとに何人かがあつまつて、組をつくり、秋から春にかけて山にはいる。かれらは、山のかに、特異な妻入りの切り妻小屋——この入り口のつけかたは、黃土地帶の穴居小屋をおもわせる——をいくつかつくり、生活する。いまではほとんど小獸しかとつていないが、かつては、おとし穴や大規模な柵をつくって、シカ類などもとつていた。

トナカイ・オロチヨンの生活が、狩猟によってささえられていることは、すでにくりかえしのべてきた。オロチヨンの社会は、その構成員のすべてが狩猟者であり、たとえ特殊な能力をそなえたシャーマンなどがいるにしても、職業の分化といえるものが、まったく見られない点において、特徴的である。その結果として、馬オロチヨンについてすでにのべられているように、森林生産物以外の物資は、すべて外部の世界にあおがなくてはならず、それらの品物の種類と量とは、との世界との接觸がふかまるにつれて、しだいに増加してきている。鉄砲と弾丸とを筆頭とする金属製品のみにとどまらず、かれらの日常生活のなかに入りこんでいる外來品は、くわしくみれば、むしろおどろかされるほどのわりあいにのぼり、馬オロチヨンの場合よりも、いっそう多彩である。

たとえば、ユルタをおおう布、毛布、洋服、シャツ、帽子、巻ケートルなどの衣料品から、ゴムぐつにいたるまで、あるいは、なべ、やかん、せともの、ほうろうびき、ガラス製などの食器類、うで輪、耳かざりなどの裝飾品、紅茶、たばこ、酒、豆油、塩、砂糖、マッチなどの嗜好品や調味料、雑貨のみならず、かれらの主食までが、獣肉にかわって、外來品であるメリケン粉やアワに変化し⁽¹⁾、くだもの、野菜までが、かれらの交易表のなかにふくまれている。このなかには、いわばぜいたく品に属するものもあるが、衣食住の基本物資の大部分が、すでに外來品によっておきかえられようとしている事実は、否定できない。

これらに対して、みずから手で生産するものといえば、住生活においては、ユルタの骨組みや、シラカンバ皮・毛皮のおおいなど、比較的まだ比重はおおきいけれども、衣服においては、冬の皮服や皮靴を主とし、それに皮手袋やもも引きなど、いくらかの附屬物がのこされている程度である。食生活においても、獣肉は、消費量はまだおおいとはいえ、すでに主食のおぎないの程度の地位にすぺりおち、魚肉や野ネギなどの副食と、肩をならべようとしているのである。そのほかの家財類では、容器類、しきもの、トナカイの裝飾具など、自家製品の

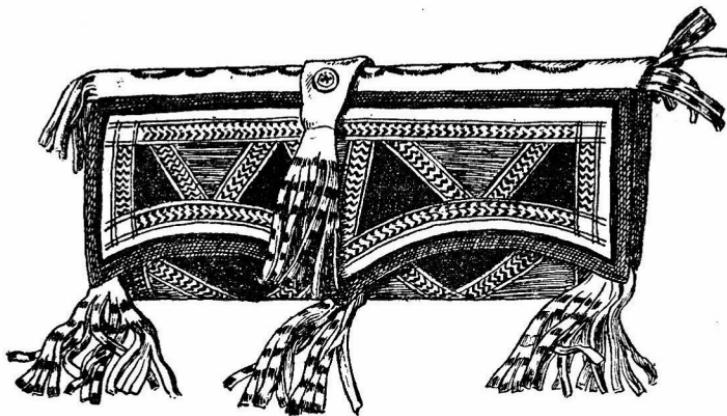


図 71. トナカイ・オロチヨンのハンド・バッグ。シラカンバの皮となめし皮でつくり、エナメルで彩色してある。

種類がかなりおおいが、一般的にみて、自家製品の生活における比重は、外來品にくらべて、しだいに小さくなりつつあるといふことができる。

外來品の買いいいは、ほとんどすべて、モーホの満洲畜産会社を通じておこなわれる。かれらは、毛皮類などの生産品をそこへもちこみ、その價格にそうちうする金額以内のねだんの物資を、みずからえらび、うけとつてかえるのである。その金高は、どのくらいになるだろうか。一九四一年一〇月から四二年六月までのあいだに、満畜から買ひ入れた品の額は、表^⑨のとおりであった。

この表には、ヤーボ、ゴシカの親子のぶんが欠けているだけで、モーホ・オロチヨンの全家族の支出をふくんでいる。一年たらすのあいだの、一家の平均支出が七〇〇円以上という数字は、たとえば表1の馬オロチヨンの年収入総額三〇〇円とくらべてみても、そうとうに多額であることがわかり、かれらの購入品に対する依存度のがなり高いことをしめしている。このときの物價

は、メリケン粉一キロ七五錢、塩一斤一五錢、豆油一斤八〇錢であった。
しかも、食料、衣料という、かつては大部分自給することもできた品目が、いまでは全支出の八五パーセント

表 9. モーホ・オロチヨン支出表 (1941年10月—1942年6月).

氏名	家族数	全食料品 ()内は嗜好品	衣料	日用雑貨	税金	その他	計	備考
ルカシカ	6	200.12(9.40)	133.52	15.10	17.28	22.00	388.02	独立生活者
ニコライ	4	532.39(149.25)	382.05	77.00	18.74		1010.18	
ピエトロ	5	528.77(136.10)	322.15	133.50	35.89	21.29	1041.60	
フェリップカン	8	479.02(114.94)	416.15	157.15	43.80		1096.12	
サンカ	6	431.17(48.90)	117.20	46.42	19.58	12.00	626.37	
ラジーメ	6	493.60(53.50)	280.90	44.10	15.97		839.57	
小計	35	2670.07(511.99)	1651.97	473.27	151.26	55.29	5001.86	
百分比		53.4 (10.2) %	33.0%	9.5%	3.0%	1.1%	100.0%	
一家平均	5.8	445.01(85.33)	275.33	73.88	25.21	9.22	833.64	
アボルン	2	239.27(57.80)	95.18	17.60	10.33		362.38	自力で家を支え
エレーネ	3	244.32(56.10)	99.90	7.00	10.79	92.30	454.31	
小計	5	483.59(113.90)	195.08	24.60	21.12	92.30	816.69	
百分比		59.1 (3.9) %	23.9%	3.0%	2.6%	11.3%	100.0%	
一家平均	2.5	241.80(56.95)	97.54	12.30	10.56	46.15	408.35	
総計	40	3153.66(568.94)	1847.05	497.87	172.38	147.59	5818.50	
百分比		54.2(9.8) %	31.7%	8.6%	3.0%	2.5%	100.0%	
一家平均	5	394.21(71.12)	230.88	62.23	21.55	18.45	727.31	

モーホの満洲畜産株式会社交易部山貨交易明細簿による。

ままでしめているという状態は、かれらの生活のなかへの、外來文化の滲透ぶりをものがたっているのである。もちろん、メリケン粉などの主食購入のうらには、けものの減少による食物不足という事情もあるだろ。が、かれらの冬のあいだの狩りの主力が、食物にはならぬリスにむけられてる点からみても、單にけものが足りないから主食を買うというのではなくて、むしろ、主食そのほかの購入を予定することによつて、狩獵活動のほうを、その方に向に調整させてているも

表 10. モーホ・オロチヨンの狩獵表 (1941).

氏名(年齢)	ハンダハ ン	アカシカ	リス	クマ	イノシシ	備考
ルカシカ(33)	14頭	2頭	69頭			
ニコライ(40)	6	8	154			
ヤーゴ(47)	2	3	220			
ゴシカ(20)	6	9				
ニスチル(27)	2	4	180			
ピエトロ(37)	8	5	210			
フェリップカン(36)	8	8	150	5 (大 3) (小 2)	9	
サンカ(39)	5	0	107			
ラジーメ(22)	14	6	75			
アボルン(74)	0	0	70			
エレーネ(59)	0	0	0			
計	65	45	1235	5	9	
平均*	7強	5	129強			

* 平均には、一人前でないアボルンとエレーネなどをのぞいた。

のとおもわれる。衣料についても、おなじことがいえるであろう。してみると、かれらの狩りは、單なる自給自足時代の延長ではなくて、かれらみずから意識しておこなうところの商品生産であり、あたらしく獲得した外来文化を、たとえ形式的にもせよ維持しようとする努力のあらわれである。生活慣習の面では、ふるい傳統がいまなお多く保存されてはいるが、その經濟活動には、

近代經濟機構の一端につながる、職業的な獵師集團としての性格が、しだいに強くなりつつあるのである。この点をもつとはつきりさせるために、かれらが一年間にえた。獵獸の頭類をしらべてみよう。サンカやルカシカたちからききとった、一九四一年のえものの数は、表10のとおりである（オロチヨンたちは、おたがいに、だれがなにを何頭とったか、正確におぼえている。かれらの社會の連帶性をしめすものであろう）。

これらの獸のうち、ハンダハンは七月におおくとれるのであるが、ちょうどこの頃は、当局の命によつてキラムトへ出でているので、冬にとる数がおおい。リスは、もちろん冬獵である。なおクマはたくさん見かけるがあまりとらず、オオカミもとつてい

ない。

トナカイ・オロチヨンの経済生活

さてこのえもののうち、自家消費にあてられるのは、ハングハンやアカシカの肉と、ハングハンの皮とであつて、そのほかはもっぱら交易用である。たとえば、アカシカの皮は二〇一三〇円、袋角は一〇〇一一〇〇円、尾は二〇一九〇円、リスの皮は一円五〇銭ないし三円五〇銭で賣れる。冬にもハングハンやアカシカをとっているのにかかわらず、純粹交易用のリスの狩猟高が、一家平均一三〇頭にのぼっているのは、さきにのべたオロチヨン経済の商品生産的性格をしめすものといえよう。かつてチャン・クエイ・タンが獵師であつたころの一年のえものが、ハングハン三十五頭、アカシカ一一二頭、リス一〇〇一三〇〇であったことを思えば、オロチヨンたちの現在のえものは、内容的にも、シナ人獵師にくらべて、たいしたちがいはないものといえる。しかもチャンさんは、その狩りにあたつて、トナカイももたず、ただいくつかの小屋を根拠にするだけで、それだけの牧穀をえていたのである。もちろん、そのころのほうが、いまよりはけものが多かつたであろうが、オロチヨンたちが、冬の狩りにいくらかの力をくわえさえすれば、たとえトナカイをうしない、なかば定住化したとしても、いまの生活は維持できるのでなかろうか。チャンさんのことばによれば、いまでも、ラオコウ附近だけで、一冬に二〇〇くらいはリスがとれるはずだが、だれもとつていないと。いまのオロチヨンたちの定住化をさまたげているものは、ながいあいだの移動生活の傳統と慣習、トナカイに対する愛着などの、たぶんに社会心理的な要素であつて、一度トナカイをうしない、その補充がむずかしくなった場合は、おおきな生活の変化なしに、さきにのべたような定住化へとうつりえられるよう、経済面ではすでに準備ができているとも考えられるのである。そうなつたあつきでも、かれらは、この森林帶の最高の利用者として、そとから他の力がくわわらないかぎり、依然として狩猟社会は維持してゆけるであろう。ただし、その社会は、すでにトナカイ飼養からはなれた

表 11. モー・オロチヨンの收入表(1941年10月—1942年6月)

本指の手袋に、色糸でロシア風にししゅうしたものなどは、もつともふつうである。リスの皮は、なめすことなく、そのまま交易に出している。

氏名	家族数	ハンダハン	アカシカ	リス	その他	計	備考
ルカシカ	6	131.00	300.00	135.00		566.00	独立生活者
ニコライ	4	128.00	1167.00	324.50		1619.50	
ピエトロ	5	95.00	685.75	144.40	36.50	961.65	
フェリップカン	8	214.50	711.35	422.00		1347.85	
サンカ	6	195.50	241.25	233.30	20.00	690.05	
ラジーメ	6	105.50	742.25	167.00	42.00	1056.75	
小計	35	869.50	3847.60	1426.20	98.50	6241.80	
百分比		13.9%	61.6%	23.9%	1.6%	100.0%	
一家平均	5.8	144.92	641.27	237.70	16.42	1040.30	
アボルン	2	133.00	197.50	141.75	13.00	485.25	自力者
エレーネ	3	116.00	382.40			498.40	で一家を支えな
小計	5	249.00	579.90	141.75	13.00	983.65	
百分比		25.3%	59.0%	14.4%	1.3%	100.0%	
一家平均	2.5	124.50	289.95	170.88	6.50	491.83	

存在であることは、いうまでもない。しかも、トナカイの生活空間としては辺境にあるこの地域では、この種の狩猟社会のほうが、あるいは安定なのではあるまいか。狩りの生産物の賣り上げ高は、表11にしめされる。

生産品を交易にだすときには、シカ類の皮はなめし、おおくは加工して持つてゆく。なめすのには、皮がまだやわらかいうちに毛をむしりとり、四角い木わく(図83)に張って日ひ乾し、小刀で両面の汚物をけずり落す。それから、ハンダハンの脳をとかした水につけ、汚物が出ればけずりとり、皮がやわらかくなるまで四一五回つづける。そして、最後に手でよくもめば、なめしあがるのである。加工は、手芸品として出す場合がおおく、五

表11において、とれる頭数のおおいハングハンの賣り上げがすくないのは、もちろん自家用消費があおいためであるが、それでも、交易に出せるだけの余分のあることは、注意に値する。アカシカは肉は自家用、皮や袋角などは交易用として高價に出せる点からいって、現在のオロチヨンの交換經濟の中核をなすものともいえる。しかし、リス猿だけでも收入の二五パーセントにちかいことは、やはりかれらの經濟が、單に自家消費の余分を交易に出すといった域からぬけ出し、商品生産を目的とする狩猟に轉化していることをしめすものといえよう。しかも、かれらの總收入が一家平均一〇〇〇円にちかいことは、たとえ、けものが減少したとはいながら、その生産活動がじゅうぶんに成功していることをものがたっており、かれらの物質生活をその要求する文化財でいろいろの余裕をあたえているのである。(以上六節 森下)

〔註〕

① たとえば、ルカシカが一九四二年になつてからの(最初は一月一三日)主食の買入れ量は、メリケン粉一〇袋、アワ二袋(一袋は二〇キロ入り)であった。われわれにであつたときは、食糧欠乏でモーホに買入れにゆくところだつたから、五ヵ月たらずのあいだに、合計二四〇キログラム、小さい子どもたちまでくわえての一家六名の、一日のメリケン粉とアワの消費量は、平均一・七キログラム、となる。

② 漁は、河をせきとめるカーテーというせき(図81)をもうけたり、もりでついたり、銃でおよぐ魚をいとめたりする。モホ・オロチヨンは、いまではあまり漁をやらないが、それでも、小さい川で、じぶんたちの食べる程度はとつている。

③ この表の内容は、つぎのとおりである。

一、食 料——主食物としてメリケン粉、アワ、ときには白米。調味料として塩、こしょう、油類。かんづめ。紅茶、ときに磯茶。嗜好品は、おもにウォツカ、白酒などの酒類、および砂糖。

二、衣 料——布地を主とし、プラトーカ、糸など。まれに毛布。

三、日用雜貨——おもに、たばこ。その他石けん、食器、なべ、やすり、バリカン、カレンダー、雨衣など。

四、税 金——賣りあげ高の三分。そのつど、山稅として徵集する。

五、その他——物資運搬費(ルカシカ)、前借りの返済(ピエトロ)、物資のかわりに現金支給(エレーネ、満畜交易所以外で物資にかえたものとみなして、支出にくわえる)など。

- ④ メリケン粉は、一人一ヶ月夏は半袋、冬は一袋までの配給をうけることができる。

クマラ河水源の偵察

大興安嶺の主稜にそうて北上した支隊のルートは、その西がわにかぎられていた。分水嶺をこえた東がわに、すこしでもふみこんでみたいという欲望は、ナーラチでわざかにみたされたにすぎなかつた。それも、ほんの数歩をこえることなく……。

補給隊が出発してから、本隊が基地につくまでの期間は、基地にいのこった隊員たちにとって、この欲望を満足させるべき、絶好の機会であった。藤田、江原、ルカシカの三人のささやかな隊は、補給隊の出発した二四日のひるすぎ、三頭の馬に六日ぶんの食糧をつんで、基地をあとにした。目標を、ビストラヤ、アルベジハ、クマラの三つの河の分水界附近におき、オロチヨンのように軽快な機動性を發揮するため、いっさいの重装備を持参しなかつた。ルカシカも、この地域の地理にはくわしくない。しかし、藤田にとっては、白色地帯のもつ不気味な圧迫感は、すでにとりのぞかれており、コンパスひとつをたよりに、ぶじに基地に帰還できる自信があった。

まず、基地のちかくで東からながれこむ、ロチヨウコウの一支部をのぼりはじめた。基地を中心として、測量網が東西にほそながくのびてるので、まず比高一〇〇メートルくらいの尾根上にたてられた三角点にのぼり、目的の方角をながめてみると、

シラカンベの二次林のしたに、あおあおと密生していた。谷そこの花崗片麻岩は、いつのまにか、安山岩にかわっていた。めざす南東の方向をながめると、森林限界をぬいた、一座の円頂峯があり、まわりの山なみから、一段とぬきでていたので、ますこれを目標とすることにした。その夜は、ロチヨウコウの最源流部にごろ寝した。多人数の隊からはみでたせいか、われわれには、内地の低山をあるくときのような氣やすさと、オロチヨンになつたようなたのしさとがあった。

夜のうちに、馬が一頭基地ににげかえったので、ルカシカは徒步になった。人により上手下手はあるが、トナカイ・オロチヨンたちが、だれでも一應は馬にのれるのは、興味があつた。この日は、ひくい峠をこえて、ニジネ・ウルギーチの支流にはいった。クマラ流域に達するためには、こうした小支流を、何本かよこぎらねばならない。地図のないところでは、こうした行進はもつともむずかしい。オロチヨン道は、すでになくなつていた。あらかじめ見当をつけておいた方向に、コンバスと勘とをたよりにすすむほかはなかつた。ルカシカの手にもたれた、長柄の大なたは、極度に威力を發揮し、かれの右手がサッとふられるたびに、かなり太い木も、こころよい音をたてて切りおされ、みるみる馬のとおれるような道がひらけていった。

三本の小支流をこえたのち、目標とする山の北がわを開析する、かなりふかい谷にはいった。時刻は三時をすぎていたが、その日のうちに登ることにきめた。はじめは、シラカンベを主とする二次林であったが、東のほうにある小鞍部に達すると、ハイマツが密生していた。のぼるにつれて、ハイマツの密度はまし、足どりをにぶらせた。

頂上に立つてみると、かろうじて森林限界に達した程度で、いじけた数本のシベリアアカマツがはえていた。アカマツが森林限界にまで達しているのは、この地方でもめずらしい。このアカマツによじのぼって、クマラ河



図 72. クマラ河水源への峠、ハナゴケの下生え、ハイマツ密生。

第二夜は、もとの谷に下って、野宿した。ルカシカは、銃にものいわすべきものがないのをなげきながらも、まめまめしく食事のしたくをし、あいもかわらぬせんぎり大根を腹につめこんだ。

た。

の水源方面を偵察した。南東東の方向には、一四〇〇一一五〇〇メートル級とおもわれる、完全なゴレツツ二座をふくむ、かなり急峻な連嶺が、すみ絵のように、スカイ・ランをかぎつづいていた。ゲン河とクマラ河との水をわかち、大興安嶺と小興安嶺とをつなぐ、イルフリ・アリンであった。主稜の西がわの河川にくらべると、ゲン、クマラのふたつの河の開析がすんでいるために、かなり急峻な山形をあらわしているのであろう。イルフリ・アリンをながめ、その山形とゴレツツの存在とをあきらかにしただけでも、この偵察行のねうちはじゅうぶんであった。われわれは、はるかなサンガリに思いをはせて、しばらくは声もなかつた。いま立っている山頂は、一三〇〇メートルくらいであろうか。その位置は、大興安嶺の主分水嶺から、やや西よりにかたよった位置にあることが確認された。われわれは、ここを、かりに南望山とよぶことにし

二六日は、野营地の谷をまっすぐ東につめて、主稜をこえる峠でた。よくふみならされたオロチヨン道が通じていた。轉石は、石英粗面岩であった。日数の関係上、あすはアルベジハ流域にはいらなくてはあぶないので、この日は、時間のゆるすかぎりクマラ河を下り、引きかえすこととした。

はじめてふみこんだクマラ河の谷は、西がわの谷にくらべると、深く、かつせまいものであった。しかし、植物や礫原など自然の景観には、たいした変化はなかつた。大興安嶺の分水嶺が、ひくい平凡な峠にすぎないものである以上、分水嶺をこえたからといって、さつと眼をうばうような景観の変化が期待できるはずのないことは、とうぜんわかつておりながら、やはり期待はすれの感じをいだかざるをえなかつた。五キロばかり下り、北から流れこむ支流との出合に、馬のないルカシカをのこして、さらに下流に馬をはしらせた。オロチヨン道はつき、ところどころに、ふるいユルタのあとをみた。谷のはばは二〇メートル、川原は、かつてみなかつたほどせまく、東にながれるクマラ河の頭部浸蝕が、西がわの谷にくらべて、はげしいことをものがたつていた。われわれは、一〇キロばかりでひきかえした。期待していた、そのあいだのルカシカの獵は、やっぱり不首尾におわつていた。かれのうでまあがわるいのではなくて、ふしぎに鳥一羽いないのである。

二七日は、クマラとアルベジハとの分水界をこえた。峠をおりかけると、すぐにオロチヨン道でた。あいかわらず、山火事のあとがおおい。アルベジハの水源は、ひろびろとした河谷原をもち、どちらに流れているかわからないくらい平坦であった。この谷をすこしさかのぼつて、また峠をこえ、つぎの谷にてて一泊した。流れの方向からみて、アルベジハ水系にぞくするものにちがいない。ルート・マップを整理してみると、基地は、ほぼ西の方角にあたるはずだ。しかし、乗馬でふくざつな山なみをこえながらつくったマップには、いささか自信がない。食糧ものこりわずかになつてくると、ふたたび白色地帯の不安がもどつてきた。ルカシカも、子どものと

隊 きに一度きたことがあるだけだ、と心ぼそいことをいう。

河 漠 二八日、ロチヨウコウとの分水界とおもわれる尾根にとりつき、基地の方向にむかって突進した。灌木が密生して、馬をつれての行進は、なかなかの苦勞だった。尾根をこえた西がわの谷は、北に向きをかえることなく、どこまでも西に向っていた。これで、ロチヨウコウにすることはほぼ確実となつたが、はたして基地より上流に

でるか下流にでるか。場所いかんによつては、まだそうとうなまよい道を覚悟しなければならないだろう。谷には、保存のよい段丘面のところどころに、ユルタのあとがある。

四キロばかりも下ったころであろう、ルカシカが奇声をあげた。ひょいと頭をあげると、見おぼえのある尾根が、眼のまえによこたわっている。まさに、第一日にのぼった三角点の尾根だ。われわれは、一分のくるいもなく、ちょうどものとの場所にかえってきたのであった。(藤田)